心のあと

蘆花

心のあゝ

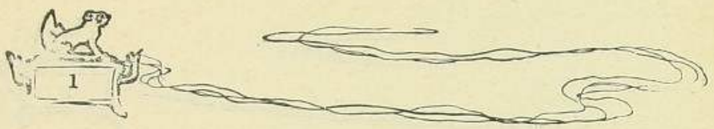
本間文庫
文庫14
D185

心のあこ

出廬

文庫14
D 185

出廬一部四編、其の第一篇は世の悦ぶに足らぬをいひ、第二篇は詩の愛す可きを叙し、第三篇に至つて、空想に遊ぶもまた竟に實在の累するところとなるを免れざるを述べ、第四篇に於て、詩と世と共に悦び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。これはこれ予が將に世に出さんとする詩集心のあと全卷の序として看る可し。



出廬

第一篇

第一章

一

おもしろや、あら、おもしろや！。
みなもと遠き　大河の
水は流れて　物言はず、
やさしく地（ツチ）を　潤して、
ゆるく去り行く　其の姿！。

二

おもしろや、あら、おもしろや！。

伸びて行くほど　手を下げる
柳の老樹　幾世經て、
風がなぶれば　身は狂へども、
眞(ホン)の心は　たゞおとなしう
水に枝垂れて　立ち盡す
じつと靜かな　其の風情！。

三

おもしろや、あら、おもしろや！。
其の物言はぬ　流れのほとり、
其の靜かなる　柳に近く、
引結びたる　廬(イホ)の中に、
我たゞひとり　物思ふ時！。

第二章

一

時知らぬ花　こゝにあり！。
見てさへ項(うなじ)の　寒けだつ
雲の小口の　破れより
時雨はら〳〵　落つる日の
世は情無う　淋しくて、
萩も　紫菀も　白菊も
千草の花の　それ〴〵も
たゞ一ト色に　枯るゝ時、
時知らぬ花　こゝにあり！。

二

時知らぬ花　こゝにあり！。
殿に祭れる　神や何？。
いつきまつれる　神や何？。
我　わが神を　念ずれば、
神のめぐみの　たのもしや！、
なさけは深き　我が神の
指さしたまふ　空の中に、
忽ち　春の風　渡り、
櫻が咲けば　虻も來て、
菜の花隱れ　蝶も飛ぶ！。

第三章

一

常住の月　こゝにあり！。
秋風吹いて　澄みわたる
瑠璃の大空　塵も無く、
氷輪　高く懸りても、
滿つればやがて　缺く恨、
十八　十九　二十日月！。
美人やうやく　面窶れして、
終焉の晦日　玉を瘞むる
天の定めの　はかなけれども、
常住の月　こゝに在り！。

二

常住の月　こゝに在り！。

盧にまつれる　神や何？。
いつきまつれる　神や何？。
我　わが神を念ずれば、
神のなさけの　頼もしや！、
恵みは深き　我が神の
指さしたまふ　空の中に、
忽ち　望の　月出でゝ、
水晶溶けて　散る光り
野にも山にも　充ち溢る！。

第四章

一

日下江の　入江の蓮　花蓮、

蓮の花の　美はしき
人の盛りを　うらやみて
丹摺の袖に　面隠しゝつ
老の涙を　絞りたる
彼の赤猪子が　悲みを思へ！。

二

みもろの山の　神籬に
傍うて生ひたる　白檮の樹の、
膚は荒び、花は無く、
たゞいかめしう　寒空に
強ばり立てる　如くなる
老いて色無き　人の身の

忌々しきさまの　なさけ無や。

三

身の盛り人　羨しき、と
涙に歌ひ　出でたりし
心の何ぞ　うら若くして、
廻る月日の　促がせる
老のやつれの　何ぞ悲しき！。

四

たのもしからぬ　人の世や！。
時の鐘の音　心無う
花顔の春の　夜を促り、
日々に吹く風　末終に

頭の上に　雪を送れば、
戀も、恨も、一トむかし！、
泣いた、笑うた、それも夢！、
後方より老の　責め來るに、
面影變る、氣も變る、
まこともいつか　虚誕となり、
互に見ざめ、思ひざめ、
心の艶光は　虚空に消え
身の醜さの　たゞ遺る！。
たのもしからぬ　人の世や！。

五

こゝに　不老の鄕！。
嬉しや！

嬉しや！、こゝに　不老の國！。
我が神の　なさけの光り、
やはらかに　照らさせたまふ
この鄕は　人老いぬ鄕！。
吾が廬に　いつきまつれる
我が神の　放たせたまふ
御光りの　渡るかぎりの
其の國は　人老いぬ國！。

六

琴の音なして　流れ行く
美和川の水　滑らかにして、
水底の石も　玉と輝やく

その川の邊に　衣洗ふ
童女は誰ぞ　美しき！。
雪のたゞむき　寒からで、
月の面輪に　雲も無し、
世の憂き事も　白栲の
清きが上に　清かれと
澣ぐ手先に　立つ水の
珠と躍つて　潑ねかゝる
その眼の前に　燕飛ぶ
春のやさしさ　身にぞ染む。

第五章

一

眼に涙なし、閻王の使者。
人を免さず、黑鐵の鞭。
「汝の壽命　既に盡きたり、
地獄の門は　開け居るなり、
猛火の車　汝をぞ待つ、
疾く〳〵乘つて　冥土へ急げや！、
罪人！、いそげ！、いそげ！、いそげ。」とぞ逐ふ。

二

竹の葉末に　置く露と、
まばし結べる　人の身に、
つれなくあたる　小夜嵐！。
さらばと地に　落ちて散る

露の聲をば　誰か聞く！。
露の聲をば　誰か聞く！。

三

蝶　愁ふれど　春老いて、
汕のやうな　降雨にさへ、
海棠　怯く　力無く、
ほろりと落つる　紅の
苺苔に點ずる　其のゆふべ、
花の芳魂　何處にか往く！。

四

紫光　匂ふ　天つ星、
此の拂曉に　地に落ちて、

馬鬼(バクウイ)が原に　冷(スサ)まじき
颯風(ツチカゼ)急に　起り狂へば、
空に騒(サワ)立つ　八千草の
亂れの中に　麗人(アデビト)の
玉の形骸(ムクロ)の　横はる！。

五

白綾　長う　しども無く、
白蛇　血を吸ふ　頸(エリ)の傍(カタ)。
たゞ草叢(クサムラ)に　棄てられて、
地(ツチ)に　蘭麝の　香を遺す！。

六

あら　あぢきなの　人の世や！。

香木も灰！、惡木も灰！、
賤の女も土！、麗人も土！。
翡翠の髪の　色艶も、
終に蓬(ヨモギ)が　もとの塵、
桃花の面　痕も無く、
荊(オドロ)が下に　骨殘る。
あら　あぢきなの　人の世や。

七

あら　あぢきなの　人の世や。
聞くに由無し、露の聲。
花のたましひ、誰か見る？。
懸ふとも甲斐の　あらばこそ。

返魂の香　銷え易く、
煙の中の　おもかげの、
煙より猶　果敢無くて、
玉の簪兒　なか〳〵に、
なまじ殘るも　恨あり。
あら　あぢき無の　人の世や。

八

嬉しや！。こゝに不老の鄕！。
嬉しや！。こゝに不死の國！。
我が神の　なさけのひかり、
やはらかに　照させたまふ
この鄕は　人老いぬ鄕！。

吾が廬に　いつきまつれる
我が神の　放たせたまふ
御光りの　渡るかぎりの
其の國は　人死なぬ國！。

九

九重の門　深く深きも、
人を防ぎて、夏を防がず。
玉の宮居の　簷近う
槐樹の翠色　濃やかに
熱き日ざしを　遮れど、
黄金の箔を　振り落す
葉漏りの光り　きら〳〵と、

瑪瑙の欄に　かゞやきて、
見る眼眩しき　正午過ぎ、
顔姣き宮女　誰も皆
瓶花に水無き　風情して、
雪を展べたる　紈ばりの
團扇の風を　たゞたよる。

十

清き香の　先ばしりして、
仙山の花　晝に咲き、
玉珮の音　妙に聞えて、
金殿の中　麗妃見はる。

十一

心ゆたけく　おほどかに、
御庭の彼方　見そなはす
御目は　秋の　露凝りて、
羅衣めせる　御姿は、
柳に　春の　雪淡し。

十二

寶劍の前、　堅きものなく、
仁者の周圍、　憎き人無し。
月の桂の　都より
假に此の世に　生れまして
楊氏の妃と　呼ばれます
君が涼しき　御姿の

あたりに何の　夏も無し。

十三

あつさも知らしめさぬごと、
悠然として　立ちたまふ
美はしき君が　御姿や！。
雲鬢（ウンクヴン）　涼しき　風を藏（カク）して、
遠山の眉　雨後のおもむき！。
照陽殿に　夏ぞ無き、
嗚呼、照陽殿、夏ぞ無き！。

第六章

洪荒の世の　事とかや。
戰ひ負けし　暴神（アラガミ）の、

瞋恚（シン井）の眼（マナコ）　火と燃えて、
憤怒（フンヌ）の牙（キバ）に　雷を咬（カ）み、
不周（フシウ）の山に　頭突（ヅキ）して
雄叫（オタケビ）　高く　死にし時、
天柱折れて　地維は欠け、
日は蝕（タシバ）まれ　月は死し、
滿天の星辰（ホシ）　亂れ飛び、
四海の潮水（ウシホ）　立つて舞ひ、
宇宙　壞（サブ）れて　とことはに、
闇とならんと　したりしを、
勝ちし女媧氏は　やさしくも
石のいろ〳〵　煉り煉つて、

天を補ひたまひたり。

第七章

一

天を補ふ　手はじめに、
取りたまひしは　白き石。
白きは彩色(イロ)の　母にして、
色といふ色　皆これに
投胎(ヤド)りて世にぞ　現はるゝ。
これより今の　人の世に、
「眞理(マコト)」てふもの　殘り居て
この世に長く　「眞理(マコト)」あり。

二

水は如是(カク)して　低く行き、
火はこれがため　高く燃え、
世のさまゞの　一切は
これに投胎(ヤド)りて　現はるゝ。

第八章

一

次に御手に　取りあげて
煉りたまひしは　青き石。
青きは清く　やすらかに、
情(ナサケ)の有りて　仇めかぬ
いとなつかしき　色の姉。
これより今の　人の世に

「仁」てふもの　殘り居て
この世に長く「仁」あり。

二

如是して親は　おろかしき
不孝の兒をも　愍然がり、
大人は　身を拋つて
衆生のために　道に死す。

三

面も知らず、名も知らず、
知らず知られぬ　人同士、
何の心も　なつ草の
原の中道　行く時に

肩にとまつた　馬蚿を、
拂つてやつたが　縁となり、
相宿したる　其のゆふべ。
水あたりして　寢ぬ夜半に、
藥もらうて、看護らるゝ、
それもをかしき　世の相。
仁てふもの　あればこそ。
仁てふもの　あればこそ。

第九章

一

笑を含みて　其の次に
取りたまひしは　紅き石。

歡喜の色！、華美の色！、
紅きは　色の　妹にて、
若々しくも　麗はしき。
これより今の　人の世に、
「美」といふものゝ　殘り居て
この世に長く「美しさ」あり。

二

うなゐ兒が　鮒釣る　里の溝川に
櫻流るゝ　春の夕暮！、
見ればこゝにも　美しさあり。
山雞は　羽搏ちて　逃げて　谷川の
水に點頭く　白百合の花！、

見よや其處にも　美しさあり。
塵の世は　塵に任せて　かゝはらず、
大空高く　澄める月影！、
かしこに高き　美しさあり。
海苔麁朶を　隱しつ見せつ　海中の
風に亂るゝ　秋の朝霧！、
こゝに幽けき　美しさあり。

三

まして女兒の　十五　十六！、
春　十分の　花の　よそほひ。
男は齡の　二十　前後！、
秋　正に滿つ　月の　精神。

身幹の矮きも　猶愛らしく、
肌色の黒きも　雄々しくて善し。

四

美といふものゝ　世にありて、
世はこれがため　香ひあり、
美といふものゝ　世にありて、
世はこれがため　光りあり。

第十章

一

「我をも　御手に　取りたまへ、
疾く取りたまへ、いざ〳〵と。」
自から　進む　黄なる石。

「さらば」と　やがて取りたまふ。
黄は　おのづから　光輝を
含める　色の　貴くて、
低きに居るを　肯んぜぬ
氣位　高き　色の兄、
氣位　高き　色の兄、
「希望」に満ちて、神々し。

二

張り弓の弦！、何ぞ　直なる！。
張り弓の弦！、何ぞ　撓まぬ！。
弦の直きは　弓　張ればなり。
勇士の一念！、何ぞ　烈しき！。

300

勇士の一念！、何ぞ　屈せぬ！。
勇士の一念　強く強きは、
胸に「希望」の　燃え　燃ゆればぞ。

三

「君命　身に在り、劍　腰に在り、
風餐　露宿　何かあらんや、
縱横　馳突す　千里　萬里、
樓蘭を斬つて　笑みて還らん。

四

張り弓の弦！、何ぞ　直なる！。
張り弓の弦！、何ぞ　撓まぬ！。
弦の直きは　弓　張ればなり。

賢者の心！、何ぞ　廣きや！。
賢者の心！、何ぞ　狂らぬ！。
賢者の心　廣く廣きも、
胸に「希望」の　燃え　燃ゆればぞ。

五

世のさがな口、我をそしりて、
誹謗の聲は　雷と　はためき、
世の小人の、我を呪咀ひて、
咀呪の毒箭　雨と　降れども、
悠然として　身じろぎもせず、
莞爾と笑みて　心ゆたかに、
雲の　往來を　下に見なして

山の　尾上に　立つ　孤松（ヒトツマツ）、
天風（カゼ）に奏（カナ）でゝ　琴の音（ネ）を
梢に獨り　起すごと、
世を敎へんと　言（コト）をなす
賢者の心　廣く　廣きも、
胸に「希望（ノゾミ）」の　燃え燃ゆればぞ。
「覺めて後、夢の悅び　甲斐無きを知り、
無くて後、物の眞價（アタヒ）を　人は知るなり。
見よ、吾が言の　いつはらぬをば、
今宵は汝　悟らずも、
明朝（アシタ）は汝　悟るべし。
賢愚の差（チガヒ）　三十里、

我　汝をば　欺かんや、
たゞ夢にして　夢をば知らず、
有るが中には　物の價を
知らずて過す　人を悲しむ！。
見よ、吾が言の　いつはらぬをば
今宵は汝　悟らずも
明朝は汝　悟るべし。

六

梅　笑へども　かへり見ず、
櫻　呼べども　見かへらず、
人生の春　幾歲の
おもしろ盛り　空にして、

頭脳(カンラ)　惱ます　幾何の問題、
夜の眼　疲らす　燈前の辭書、
下宿の二階　輕薄の
障子の破(ヤ)れが　舌出して、
野暮と笑へど　苦にもせず、
「雪に身を偃(フ)す　吳竹の
やがて世に立つ　日を見よ。」と
學びの窓に　蹋(セクバ)まる
書生も「希望」　抱くなり。

七

前世如何なる　罪ありて、
此の世　悲しき　薄命(フシアハセ)！。

舞の扇の　黄金(コガネ)　照る、
其の若かりし　往時(ムカシ)より、
歌の澁味を　人褒むる
昨日に今日の　憂き身まで、
誰がため　描く　眉の月、
月の筵に　笑を賣り、
言葉に花の　美はしき
色を持たせて　賓客(マロウド)に
酔をすゝむる　花の宴。
人それ〴〵の　機嫌取る
風に柳の　あしらひも
ほと〳〵厭きて　自分から

懊惱（ヂレ）る　心の　もつれ絲、
解（ホド）けぬ　思ひ　癪（シャク）となる

女も　終の　末々に
頼む「希望」の　あればこそ、
何をか祈る　神まゐり、
えりもと寒き　曉天（アカツキ）の
風を厭はぬ　事もあれ。

八

奥山に　眞柴苅る翁、
溪川に　衣あらふ婆、
荒磯に　かぢ布（メ）取る海人（アマ）、
牛の脊に　笛吹く童（ワラベ）、

人といふ人　誰か皆、
「希望」の無くて　世にあらん。

九

人　一日の　命（イノチ）あれば、
人　一日の　希望（ノゾミ）あり、
人　その希望　絶えざれば、
人　その生命（イノチ）　絶えぬなり。

風は一年　二十四番、
番々の風　吹いて休まず。
人は一生　二萬餘日、
日々に希望の　光輝（かがやき）を見る。
希望てふもの　世にありて、

退潮に待つ　來る潮、
滿潮に待つ　減る潮、
沈む日に待つ　明日の朝、
入る月に待つ　此の夕、
世は勇あり、光明あり。

第十一章

一

たゞ默す　黑き石、
「この我を　誰か遺れん」と、
たゞ默す　黑き石、
「われ如何で、遺らるべき」と。
破れし天を　補ふに、

此石を缺きては　叶はじと
最後に御手を　さしのべて
取りたまひたり　黑き石。

二

黑きは色の　父にして、
力ある色！、　强き色！。
百種の色　皆、これに出で、
百種の色　皆、これに服す。
色といふ色　黑にあひては
勝ち得るものも　何あらばこそ。
藍花の青きは　褪染となされて、
臙脂の紅きは　たゞ澤を增す。

力ある色！、いと強き色！。
これより今の　人の世に
「強力」てふもの　殘り居て、
この世に長く　強力あり。

三

天に聳ゆる　千尺の
巖　二つに　劈ざきて、
山も　とぐろに　たぎり落つる
水の強さの　頼もしや！。
白雲　絶壁を　蝕んで、
老樹しづかに　枯藤垂れ、
亂石　堰切る　溪狹く、

山靈　水の　去るを惜めど、
「我　大海に　到るべきなり。
我　大海に　ゆかんとぞおもふ、
我　強力あり。我　進む。
磧礫は　我　推し流してん。
磐石は　我　躍り超えてん。
我強力あり。我休まじ。
さへぎる岩は　岩　潰やしてん。
攔住むる岸は　岸　崩してん。
我　鬪戰を　厭はざるなり。
我が吶喊し　怒號する
聲は　常磐に　衰へじ。

見よ、大海に　到らでは、
必らず　已まじ、休まじ。」と
獅子と狂つて　雷と鳴る
瀧川の水！　瀧川の水！。
水の強力の　頼もしや。

四

水暗き　野澤に生ふる　蒲の葉の
裏面這ふ　螢　猶嫩き
それより弱く　幽微なる
光り　小さき　一點の
火の有つ　強力　すさまじや。
初め　熒々　力無けれど、

やがて　灼々　明るさを做し、
炎々として　誇り　出せば、
いつか　みづから　風をさへ呼び、
烈々として　怒り盛れば、
終に激して　雨にさへ勝つ。
火の有つ強力　すさまじや。

五

「我、我が觸るゝ　一切を、
伴ひ　連れて　天に還らん。
天つみ空の　日の神の、
勅令　かしこみ　天に還らん。
日より來れる　もろ〳〵のもの！、

神　汝等を　召したまふなり。
我に從ひ　天に昇れや。
日より來れる　もろ〳〵のもの！、
原に還れと　神　宣らせたまふ。
我に從ひ　天に到れや。
我は　還原を　促る使者なり。
我が眼の　走り　行くところ、
物　皆　黑き　烟をあげよ。
我が手の　指の　さすところ、
物　皆　赤き　炎を立てよ。
我が鞭の　責め打つところ、
崩れよ、墮ちよ、地に委せよ。」と

起つて　猛威を　打ふるふ時、
火の　有つ　强力　すさまじや。
甕　聳ゆる　花の雲、
黃金の　蛍尾　日に逼る
阿房の　宮殿も　たちまちに、
赤龍　蜿蜒る　最大梁、
紅蓮　かゞやく　圓柱、
扇硾に　風煽る
眞黑煙　先立つて、
萬點の星　迸り飛び、
魔君　號呼す　聲の文、
燒け落つる音、　爆裂る音、

たゞ恐ろしき　一團の
火炎（ホノホ）の山と　燄え立ちて、
百里を照らす　火の光り、
幾日　空（アダ）に　大空を焼く。
火の有つ強力（ツヨサ）　すさまじや。

六

綠の色の　新しう
一ト夜に　伸びて　若竹の
はや、いさぎよき　音をなしつ
さやぎぞ初むる　朝あらし。
一ト夜に　つゝと　伸びし若竹！。
竹には竹の　強力あるかな。

七

日は　暖かに　蝶　倦んで、
しづかに垂るゝ　繡簾（ザン）の
内に　人無く　沈（ザン）　薫る
富家の　庭の　初夏の日（ヒル）午、
玉卷く芭蕉　忽（コツ）として
輾（キシ）り　開けて　枝蛙（カハヅ）驚く。
生絹（キヌ）　日に透く　碧（ミドリ）一張（チヤウ）、
戀羽　風あり　搖ぐ翠光。
たちまち　開く　玉卷く芭蕉！。
草には　草の　強力あるかな。

八

自己を支ふる　物質の強力！、
他を動かす　ものゝ強力！。
強力交はり　萬象をなす、
強力無ければ　世は空虛なり。
動いて休まぬ　心臟の力に、
六尺の身は　熱き血を盛り、
進んで飽かぬ　精神ありてぞ
人生五十　夢ならぬなる！。
強力のありて　人の世は立つ。

第十二章

一

白き石、また　青き石、

赤き石、また　黃なる石、
黑き石をも　取り採りて、
女媧氏は　これを　煉り煉りつ。
終に天をば　補ひし
其の往時こそ　恨あれ！。
五色の石を取り煉つて、
猶一ト色の　好き石を、
遺れし事の　口惜しや。
天　これがため　猶缺けて、
補はれても　猶足らず、
世は　これがため　とこしへに
人の泣くべき　世となりぬ。

二

あゝ、忘られし　其の石は
そも〳〵　何の　色の石？。
あゝ、遺されし　其の石は
たゞ　水色の　石なりし！。
水色の石！、色の無き石！、
露に　影無く　玲瓏と凝り、
色の無き石！、水色の石！、
氷　曇らず　晶瑩（シャウエイ）と照る。
この色　有りて　猶無きがごと、
餘色（イロ）に交りて　色を奪はず、
この石　堅く　獨り勝れて、

不壞（フエ）の德をぞ　身に具へたる。

三

おもへば　恨み　ある太古（ムカシ）かな！。
有色の石を　採り取つて、
無色の石を　取り忘れ、
五色の石を　煉り煉つて、
水色の石　煉らざりし
女媧（ヂョクワ）氏の　事功（ザ）の　愚しや！。
その　色も無き　水色は、
色の中にも　とこしへの
榮えを有ちて　いつまでも
變らで　若き　色の弟（オト）、

又　上も無く　めでたかりしを
取り忘れたる　それよりぞ、
天は起初(ハジメ)に　復(カヘ)らずて、
さらでも辛き　人の世に、
「長久(トキハ)」てふこと　無くなりぬ。
恨めしの世や、何しかも
世に「長久(トキハ)」てふ　事の無き！。

四

岩根峻(サカ)しき　高山(タカヤマ)の
溪水　日夜　沙　流る。
沙　いづくへと流るぞや。
見よ、山　瘠する　秋の暮！。

五

水に底無き　山沼(ヤマヌマ)の
萬頃　碧く　澄み切りて、
一夜　天(ソラ)より　黑雲の
垂れて　水面(ミモ)に　觸れし時、
俄に　迸(ソシ)る　稻妻の
光の絲の　縫ふ　雨の闇、
樹を拔き　枝をもぐ風に、
連れ　とぐろきて　龍卷の
起りし事も　ありしとよ。
その沼　今は　あせ涸れて、
昔語の　たゞ殘り、

見よ、菫咲く春の朝。

六

なさけ無き世や！、いかなれば
「永久」てふことの　更に無き！。
天人もまた　五衰あり。
美女の芳魂　あくがれて、
化り出でし蝶の　慾も無く、
たゞ　うら〳〵と　世を經るも、
野分情無く　吹き立てば、
羽の白粉　日に落ちて、
弱り〳〵し　其の果は、
終焉の姿の　口惜しく、

霜の小川の　水に委す。
なさけ無き世や、いかなれば
永久てふことの　更に無き。
蝶の衰へ　嗚呼　情無や。

七

口惜しき世や！、いかなれば
「永久」てふことの　更に無き。
英雄の末路　また悲し。
怒り毛　空に　逆立て、
月に一ト聲　叫ぶ時、
林木　急に　恐れ　戰き、
秋ならざるに　ひら〳〵と

三片　五片　葉をふるふ
獅子王の威も　力無や。
金毛薄く　光り鏽び、
弛める皮に　骨高き
老いての後は　昏々と
陽炎（カゲロフ）　燃ゆる、黄沙（スナ）の上、
椰樹（ヤシ）の根方に　たゞ眠る
其の眞額（マツカウ）に　蒼蠅（アヲバエ）の
翼（ハネ）小ざかしう　振舞ひて、
むさきものして　侮れど、
怒りも得せず、物うげに、
わづかに　耳朶（ミミ）を　振つて已む。

口惜しき世や、いかなれば
永久てふことの　更に無き！。
獅子の末路の　嗚呼　口惜しや。

八

世はかゝる世ぞ、世はかゝる世ぞ。
怒るも　おろか、泣くも　おろかよ。
涙　淋しき　雨の　芙蓉の
花の笑顔（エガホ）を　強ひて爲（ツク）つて、
美人梅川　よくぞ云ひたる。
「同じ浮世に　同じ花、
芳野　初瀬に　常夏（トコナツ）の
櫻が　咲くぢやあるまいし。」と。

世はかゝる世ぞ、世はかゝる世ぞ、
實にいづくにか　常夏の
花の咲く里　あるべきや。

九

世はかゝる世ぞ、世はかゝる世ぞ。
頼むもおろか、恨むもおろか。
「後の世までも　迷はん」と
戀に　泣きしは　むかしにて、
「我をも　忍ぶ　人あらん」と
心の泉　塵を絶つ
歌に癒せたる　老の身の、
燈火　青う　瞬(マタ)きて

凍れる鐘の　音の渡る
夜寒に　擁す　桐火桶、
彼の俊成が　ほそ〴〵と
呻(ウメ)き出せる　聲を聞け。

「世の中を　おもひつらねて眺むれば
むなしき天に　消ゆる白雲」、
消ゆる白雲　痕無しと
ながめし思ひ、幽玄(ユウゲン)なる哉。
實に世の中の　貧富怨親、
宮も　藁屋も　仇もなさけも
眼に見ゆる間は　しばしにて
やがて忽ち　消え失する

末白雲の　相形ぢや迄。

十

色無き石は　忘れられたり。
世に永久なる　事も無し。
卯月の風に、櫻　空しく、
十六夜の天、月の缺け行く！。
八十年を　戀に　惱みし
あはれ　赤猪子、　何とせん　老。
四百餘州を　色に亂しゝ
よしや楊氏も、詮の無の　死や。

十一

世に眞理あり、世に永久無し。

眞理　そも〳〵　何のまことぞ。
「まこと」は　夢の　國の　法律よ！。
「まこと」は　夢の　國の　法律よ！。

十二

世に仁あり、世に永久無し。
仁　そも〳〵　何ぞ　はかなき。
仁は　風の　中の　花の香！。
仁は　風の　中の　花の香！。

十三

世に永久無く、美しさあり。
その美しさ　何に似たるや。
暴風雨の　起る　前の　蕪虹！。

あらしの　起る　前の　蕪虹！。

十四

世に希望(ノゾミ)あり、世に永久(トキハ)無し。
開けば　何も　無きものを、
戀しき人の　なつかしき
ものゝ藏(ワサ)めて　ありとおもふ
その玉手匣　ひらかんと
勉むるほどや　世の希望。

十五

世に強力(チカラ)有り、世に永久(トキハ)なし。
蝋(ヒ)の燃ゆる時、蠟耗(ラウ)せて、
強力　去る時、強力あり。

強力は往かず、また來ずて、
天飛ぶ星の、飛びて行く
さきには物も　無きに似たるよ！。

第十三章

女媧氏　このかた　月日茫々、
現世(ウツシヨ)　終に　賴むべからず。
天は　歪(ユガ)みて　長く　缺け。
地は　傾きて　猶　足らず。
七星　めぐり　めぐり從ふ
彼の北辰も　正北(マキタ)には居ず。
磯に打つ浪　止む日なけれど、
海は　やうやく　南へと退(ヒ)く。

自然の定め、既に如是なり、
人間の事　また　何か　あるべき。
現世　終に　頼むべからず、
現世　終に　頼むべからず。
まことに　曲も　無の　現世や。

第十四章

一

うつし世　言ふに足らず。
いふに足らず　うつし世！。
我　現世に　心無きなり。
我　現世と　相忘れてん。
我が生　いくばく？、

笑む日　いくばく？。
この　現世に　泣きて　愁ひて、
何　いたづらに　悶え　狂はん。
われ　現世に　眼をば背向けて
我　たゞ　睡る　吾が廬の中。
廬に　友あり、其の名は柳。
柳　客あり、其姓は陶。

二

酒　濁りあり、濁れるもよし、
濁れる酒を　且つ酌みて、
琴に絃無し、絃無きも好き
絃無き琴を　かい撫でつ、

陶氏の翁　醉ふて歌ふて

「鼎々たりや　百年の内、
これをば持して、何　成さまくす。
呵々。」と笑うて。長く嘯く
聲　おもしろう　我が耳をうつ！。

第十五章

一

うつし世　いふに　足らず、
よろこび　何か　あらん。
つうし身　いふに　足らず、
かなしみ　何か　あらん。

二

我と　世と　共にいつはり、
世と我と　相あやまりて、
この世をば　眞實と思ひ、
この身をば　我とおもひて
年月を　あたら過しつ
春秋を　あたら經つるも、
現世の　いふに足らぬを
つくづくと　おもひさとりて、
現身の　いふにたらぬを
しみじみと　おもひ知りぬる
其の日より　我　籠りける
これの廬に。

718

三

廬(イホ)のうしろの　柳しづかに、
柳の絲の　盡日(ヒネモス)に垂れ、
廬の主人の　心しづかに
心の水の　とことはに澄む。

第二篇

第一章

一

現世(ウツシヨ)いふに　足らず、
よろこび　何か　あらん。
現身(ウツシミ)いふに　足らず、
かなしみ　何か　あらん。

二

我と　世と　共にいつはり、
世と我と　相あやまりて、
この世をば　まことと思ひ、

この身をば　我とおもひて。
年月を　あたら過しつ
春秋を　あたら經つるも、
現世の　いふに足らぬを
つくづくと　おもひさとりて、
現身の　いふにたらぬを
しみじみと　おもひ知りぬる
其の日より　我　籠りける
これの廬(イホリ)に。

三

廬(イホ)のうしろの　柳しづかに、
柳の絲の　昔日に垂れ、

廬の主人の　心しづかに
心の水の　そこことはに澄む。

第二章

一

現世は　まことにあらず、
現身は　我にもあらず。
現世は　影にも似たり、
捉へんに、捉へ處(ド)も無く、
現身は　讎敵(カタキ)の如く、
いたづらに、我を苦しむ。

二

浮世は廻る　廻り燈籠！。

はじめをはりも　無く動く影、
動きて動く　火の消えぬ間は！。
この身は　何の　我の讎敵ぞ！、
心の　常に　それにひかれて、
ひかれ〳〵て　長く忘れぬ！。

第三章

一

造物　人に　戯れて、
人を五尺の　身に封ず。
五尺の此の身　何か好き？、
此の身は鐵の　囹圄（ヒトヤ）ならずや。

二

囹圄（ヒトヤ）　たゞ有り　窓五つ。
見よ　其の窓を　數へ見よ。
第一の窓　眼と名づけ、
第二の窓は　耳といふ、
第三の窓　鼻と呼び、
第四の窓は　口といひ、
第五の窓は　肌膚（ハダ）といふ。
たゞ五つある　その窓の
中より外を　眺めては、
腰の鎖の　千斤の
重さに地へで　泣きながら、
苦み躍り　跳ね狂ふ

痛せ猿猴　ひとり呼はつて
「我は人ぞ。」と　誇りいふ。

三

自から人と　誇れるものよ！。
人にもあらめ、猿ならじ。
猿にも似たる　醜の奴よ！。
猿にもあらめ、人ならじ。

第四章

一

造物　才を　もてあそび、
人に示すか！　自己が技巧。
長さは　萬里　萬々里、

廣さも　萬里　萬々里、
見れども盡頭の　無き網を、
大初このかた　數千年、
今だに編みて　編みやまず。
大空の中に　懸け晒らす！。

二

網は目も狹き　桔梗ずき、
風逗むべく　細密なり。
其網や何？、　其網や何？。
網に名ありて　「人の世」と呼ぶ！。

三

西に沒して　東に出で、

南にくゞり　北に現る、
網針の動き　須臾も休めで
造化の編める　この大なる
網をぞ　人は　人の世と呼ぶ。
網をぞ　人は　人の世と呼ぶ。

四

一ト目の四方　四つの結節、
一節の中心　四線　攫まる。
絲　縦横に　走り絡みて、
力　互に　相保ち依る。
左を引けば　右の引かれて、
上方張らるれば　下方もまた張る、

網の相は　そのまゝに
吉凶ともに　響きあふ
この人の世の　相なり。

五

結節積んで　網を編み成し、
人あつまつて　現世を成す。
我も一つの　その結節よ。
他も一つの　その結節よ。
わが目の上の　結節の
近き二つは　父　母よ。
わが目にならぶ　結節は
妻よ、弟よ、兄　姉よ。

わが目の下の　結節(ムスビメ)は
我より出づる　子よ、孫よ。
我に縁ある　朋友(トモドチ)は
絲相近き　仲らひの
その結節の　數々よ。
あゝ現世(ウツシヨ)の　わづらはしきや。
造物　我を　編みつけて
我を一つの　結節とし給ぬ。

六

われ自由なし　われ自由無し。
われたゞひとり　如何でかは
我がおもふまゝに　世にはあり得ん。

網は　連り　連れり、
恒沙(ガウシヤ)の數の　結節の
こなたの端の　結節と
かなたの端の　結節と
間は遠く　隔てゝも、
千里相牽く　絲の綾。

七

世に區劃(シキリ)てふものも無し、
幾千年は　縦につらなり、
幾大國は　横に布けども、
過ぎし世の人　今の世の人、
彼の國の人　此の國の人、

間は遠く　隔たるも
辿れば緑の　無きも無く、
たゞせば心　通はぬも無し。
血統つらなる　百代の前、
勇に誇りし　猛き祖先の
その血の熱は　われに傳はり、
我が胸の中　火は燃ゆるなり。
山河はるかに　遠く距れし
異國人の　物をおもひし
そのおもひ　猶　こゝに傳はり、
我が胸の海　これを湛ふる。

八

世はたゞ網ぞ、我はたゞ
その結節の　一つぞや。
結節　一トつ、おのれのみ
善くとも何の　甲斐あらん。
此の人の世の　煩さきに
我　白壁の　徳を懷くも
人の踢立つる　紛々の塵
落ち來て積もる　そを如何にせん。
此の現世の　何か好き！、
此の現世の　何か好き！。
現世はたゞ　我を苦しむ。
我たゞひとり　善き　甲斐無や！

隣家の嬰兒　泣き叫ぶ時、
我が酒　不美く　みづくさく、
對戸の妻の　鰯燒く暮、
我が梅　薫る　ゆかしさも無し。

第五章

一

うつし身　いふに足らず、
此のうつし身の　何か好き！。
うつし世　いふに足らず、
此の現世の　何か好き！。
實在　すべて　いふに足るなし、
空想　ひとり　よろこびつべし。

二

實在　實か？。實在は空！。
空想　空か？。空想は實！。
見よ！、實在は、たゞ貝の殼！。
醜く　磯に　横たはるのみ。
聞け！、空想は　鳥の飛ぶ道！。
妙に　虚空に　充ち滿てるなり。

三

磯の貝殼　日に曝れて、
其末　終に　何處にか行く？。
其末　終に　何處にか行く？。
鳥の飛ぶ道　跡も無けれど、

虚空はすべて　鳥の飛ぶ道！。
鳥の飛ぶ道　長く留存まる！。

第六章

一

銅雀の臺　いづくにかある？。
たゞ蜃樓と　消えてほろびて
一片の遺瓦　既に稀有なり！。
バベルの塔の　何となりしや？。
幾冊の書の　枕くづれて、
假寐の夢の　痕無きが如！。
實在の實、　空想の空、
相距る事は　一歩半歩よ。

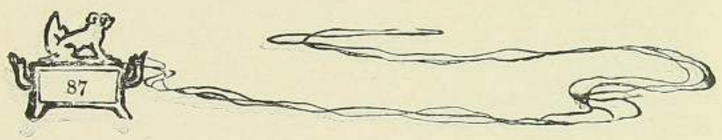
二

實在や何？、空想や何？、
物質の　虚空を　塞ぐをば
これ實よとて　人は重んじ、
思想の　時間を　塡むるを
たゞ空として　世は輕く視る。
おろかや　實も　實ならで
空も　空には　あらざるを、
妄執の雲　深くして
解脱の月の　冴を見ず
自他迷ふ　五七十年！。

第七章

一

白髪の　二人の翁、
碁を圍む　小齋の中。
其の心　たゞ石子に在り。
得失に　心を勞らせ、
殺活に　思をいたむ。
長き眉　或は皺み、
嗟く聲　時に起りて、
ひたすらに　相爭へど、
一局の　其の碁　終れば、
其の石子を　取りても行かず、
其の石子を　そのまゝ置きて、



ゆるく吹く　煙草の煙、
悠然と　笑ひ語らふ。

二

心と心　戰つて
我と彼とが　碁を圍む。
石子は假物！　石子にそも
何のあるべき！。石子は假物！。

第八章

一

岸の楊樹の　もさ〳〵と
生ひたる中に　身を埋め、
河の流れに　打對ひ、

隱士　盡日（ヒネモス）　鯉を釣る。

二

釣綸（ツリイト）　たるむ　春の風、
黄蝶　睡る　釣竿（サヲ）の先、
天地　音無く　雲淡く、
河水（カスヰ）　碧（ミドリ）に　膩膏（アブラ）凝る
景色長閑（ノドケ）き　彼岸過ぎ、
心は釣魚（ツリ）の　ほかも無く
時を過ごして　其の夕、
歸りて魚を　家貧の
隣りの嫗（ババ）に　呉れてやる。

第九章

一

心　心を　和らげて
われたゞひとり　釣を垂る。
魚は假物！、魚に抑
何のあるべき！。魚は假物！。
現世　何ぞ。現身　何ぞ。
實在は　皆　釣の魚！
物質（モノ）は　皆たゞ　碁の石子（イシ）よ。
我嫌はずば　其（ソ）を假りるまで！。

二

魚忘るべし。石子忘るべし。
達人の碁は、石子無くて濟み、

高士の釣は、鉤に魚餌無し。
絃無くて琴　聽くべくば
宮商の調　それも要なし。
實在すべて　忘るべきなり、
空想ひとり　樂みつべし。

第十章

實事は　積んで　歴史　世に生り、
空想　凝つて　詩歌　あらはる。
歴史の　あたひ　そもや幾何？。
詩歌の　かをり　なつかしや　たゞ。

第十一章

一

夜半の寐覺に　聞く雨の
ふりにしかたを　かへり見て、
燈火ほそき　閨の中、
浮世　過ぎ來し　我が歩の
踪跡をおもへば　はづかしや。
おもふ通りを　そのまゝに
心まかせに　眞直に
つい　歩いたる　事も無く、
潮のさし引く　沙濱の
浪打際に　風あらき
中を　うね〳〵　幾うねり
すぢりもぢりて　千鳥行く

それにも似たる　ありさまや！。
事實は心と　異なりて、
心に事實は　伴はず、
胸の思ひは　空になり、
たゞ　いつはりの　痕殘る！。

二

歴史の價値　そもや若干！。
かよわき鳥の　濱づたひにし
その足跡が　何の眞實ぞ！。
さして退く潮！、潮の妨害！、
吹いて　吹く風！　風のいたづら！、
潮と風とに　心ならずも、

直には行かず　立枠に行く
かよわき鳥の　濱づたひにし
その足跡が　何の眞實ぞ！。
何の　歴史の　まことめかして
事實　事實で　きつい嘘つく！。
六千年の　人間の歴史は、
濱の千鳥の　足跡ぢやまで！、
濱の千鳥の　足跡ぢやまで！。

第十二章

一

世に事實ほど　虚妄なるは無し！、
世に事實ほど　うそなるはなし！。

深潭の水！、深潭の水！。
水は表面(オモテ)の　暗くして
くぐりて見れば　ほがらかに
中は明るく　光りあり。
明燭の火よ　明燭の火よ！、
火はその外邊(ソト)の　光れども
中心(シン)は黑みて　薄青く
内部(ウチ)は却つて　ほの暗し。

二

ゆかしと思ひ　そめし時、
口でけなすは　戀の癖、
たゞ人前を　いろ〳〵に

誘(ソシ)つて置いて　反對(ウラ)に
心の底に　なつかしむ。
世に事實(マコト)ほど　虛妄(ウソ)なるはなし。

三

まこと好かぬは　慇懃の
坐なりの言葉　美しう
候べく候に　あしらふて
逆らひもせず　留めもせず
流して仕舞ふ　塵芥(チリアクタ)、
潮に任せて　埒明ける。
世に事實ほど　虛妄なるは無し。

四

世に事實ほど　うそなるは無し。
黃玉の盌、瑠璃の壺、
褒むる男は　まづ買はず！。
酷い事いふ　有情漢の
牡丹　賣らるゝ　花の市！。
世に事實ほど　うそなるは無し。

五

世に事實ほど　うそなるは無し。
氣は世を蓋ふ　項王の
猛きも　虞氏に　つらからず！、
情餘れる　樂天の
樊氏を放ると　いひしあはれさ！。

世に事實ほど　虛妄なるは無し。」

六

世に事實ほど　虛妄なるは無し。
まして事實も　傳はらずして
持つ酒盞の　酒にさへ
蛇と動ける　弓の影、
蛇となりたり　弓の影。
歷史が　何の！。何の　歷史が！。
何の！、歷史が　實傳ふる！?。
虛妄を　つらねて　世に歷史あり！。
おろかや人の　自己をいやしみ、
自己を歷史の　犧牲とせんとす！。

歴史の犠牲と　身をなさまくす
意の何ぞ　自己を卑しむ!?。

第十三章

一

實在　いふに足らず、
物質　たゞ假るべし、
世に事實ほど　虚僞は無く、
虚誕を束ねて　歴史成り出づ。

二

うき世の人の　おろか！おろか！、
たゞ實在を　實と尊とみ
この空想を　空と蔑視して、

我が懷中の　珠を忘れつ、
河原の沙裏に　黄金を覓むる！。
何ぞや河原に　疲れ勞るゝ！。

第十四章

一

歴史の神像の　見ても見にくや！。
たゞ冷やかに　重き鉛を
つくねくて　其の肢體成る。
見よ、其の像は　天に沖りて
世にいかつげに　聳え立てども、
「史家」と名を呼ぶ　里の童兒が、
絶り　まつはり　這ひ上りては

小さき鐵の　鎚を手に取り、
「此處の肉置　我が神の
眞相に似ず、」と　丁々と擊ち、
「こゝの筋骨　我が神は
如是おはさず、」と　打き打きて、
休む時も無く　鎚を揮へば、
神像は鉛の　反抗力乏しく、
打たるゝまゝに　默々として
片頰は隆く　片頰は低く、
或は額に　瘤と陷缺とを
鎚ち成されても　そのまゝに
寂ばれしごとく　立ちたまふ。

歷史の神像の　見もて見にくや。
抑や神威の　いづくにかある！。

二

おろかや人の、人のおろかや。
生命もあらず、光明も無き
歷史の神像の　足下に立ち、
神の慈愍の　まなじりを得て
その懷中に　かきも抱かれ、
恩寵に誇る　兒とならんとて、
櫻咲く春　春にそむきつ、
友おもふ夜を　友もたづねず、
戀もなさけも　犧牲にして

など其の神を　崇め尊む？。
神　靈ありや。神に靈無し。
神　情ありや。神に情無し。
鉛の神像を　そも何にせん！、
たゞ冷やかに　重きばかりの
鉛の神を　そも何にせん！。

第十五章

冷やかにして　重きばかりの
酷き歴史の　神の御前に、
膝を屈めて　何をもとめん！。
詩歌の神は　愛に滿ちたる
御手さしのべて　笑を含みて、

吾が頂をば　摩でたまふなり！。
あらなつかしの　我が神や！。
子は孝ならで　親を殘して
他鄕の山に　遊びくらせど、
親は飽まで　子をおもふ
心　千里の　野に迷ふ！。
人　詩の神の　愛に負きて、
たゞあさましう　現世の
榮華の衢　慾の辻、
そこにかしこに　狂ひても、
神は　あはれと　見たまひて
憎しとおぼす　こども無く、

たま〳〵辛き　瀬にあひて、
その御仁慈の　懸しさに、
一ト聲呼べば　時も無く、
「わが兒！そこにか！いとしや、」と、
火のもゆる中　水の中
劍の光　飛ぶ中も
厭はで走り　來たまひて、
世にあたゝかく　柔かき
御袖の下に　罪の子を
おほひて護ひ　たまふなり。
あらなつかしの　我が神や。

第十六章

一

風無き晝も　ざわつきて
浪の頭の　皆白む
阿波の鳴門の　春の潮！。
その潮さゐに　笹の葉の
小舟浮べて　漕ぎ渡る
人の世のさま！　あはれなり。
漕ぎて渡りて、いづくにか
結局の碇泊地の　好き處ある？。

二

平沙　連なる　天の盡頭、
新月　血より　紅くして、

物に露無く　風乾き
疲労れし駱駝　膝を折る
沙漠の旅の　夜の夢に、
清泉　流るゝ　音を聞く、
それにも似たる　人の世や！。
嬉しき夢は　さめ易く、
辛きおもひの　日は長き
六十年の　旅行の末、
やつれ〳〵て　辿り着く
其處に誰ある！？、誰そこにある！？。
闇に倚つて待つ　母もあらねば、
主を見て勇む　狗もあらずて、

人聲もせず　燈も見えず
たゞ夕靄の　籠むる故郷！。

三

見る眼も眩む　水の渦！、
鳴門の船に　身を載せつ
浪に幾春　たゞよひて
つひの碇泊地も　もとめかね、
たゞいたづらに　疲れたり。

四

足蹠焦ぐる　熱き沙、
沙漠の旅に　喘ぎ〳〵
照る日の下を　我行きて

夜の夢の

我幾度か　夜の夢の
果敢無き痕を　悲しみて、
空しく　涙　しぼりたり。

五

鳴門の船路　我　堪へず、
沙漠の旅に　我　倦みぬ。
人の世　つひに　いづくにも
つひの泊りの　頼むべき
ところも無きを　よく知りて、
人の世　つひに　いつか我が
樂しき夢の　覺むる夜半
「あなや」と聲を　立つべきを

身にしみて　我　おぼえたり。

第十七章

夜に入つて　たゞ　鶴白く、
桃李隱れて　梅殘る！。
人やゝ老いて　神を知り、
世念失せて　詩をおもふ！。
浮世の憂さに　堪へかねて
さまよへる子の　母を呼ぶ
聲も涙に　打曇る
其におなじき　我がおもひ、
他し意も　今は無し、
われたゞ頼む　歌の神！。

わが廬に我が　いつく御神は
空想の神！、歌の神！。
あらなつかしの　歌の御神や。

第十八章

一

寒さ怯るゝ　優育ち、
美人　爐に寄る　冬の夜。
見よ　紅色の　爐中の火、
春を湧かして　柔らかに
とろ〳〵燃ゆる　美しさ！。
眞紅の躑躅花　日に暎えて
水にうつりて　影動く！。

二

火の燃ゆる時　石炭價値あり、
燃えざらばたゞ　一塊の石！。
一塊の頑石！　黑く醜し、
長く塵土に　棄たるべきのみ。

三

頑石　價値無し　火に價値あり、
火に價値あり　頑石　價値無し！。
心ある時　身に　價値あり、
心なき時　身に　價値無し！、
頑石たゞ燃えよ　燃えよ　熾んに！、
燃ゆる時汝が　光輝あるべし。

たゞ一心の　火光無からば、
五尺の形骸　膿血を盛る
此の身醜く　厭ひ棄つべし。
三百の骨　皆一心の
花と燃え立つ　火を揚げて
燃えよ　熾んに　人の一代。
燃ゆる時　人　光輝あるべし。

四

石炭の中には　火の價値
さらにあらずて　火の中に
石炭の價値の　有りけるを、
我か身の中に　我ありと

思ひ僻めて　何時よりか
心の中に　身のあるを
忘れ果てけん　愚さよ！。

五

心は火なり　身は燃材なり。
綾の幅紗に　石炭をつゝみて
秘めしむかしの　はづかしや！。
思ひは主なり、物貨は奴婢なり。
尊き頭　押し下げて
奴婢を崇めし　むかしをかしや。
現身何ぞ、いふに足らず
心まことに　いとをしむべし。

現世(ウツシヨ)は我　おもひきりたり、
詩歌の神の　御國戀しや。

第十九章

一

歌をおきて　あだし心を　我有たば、
毒龍怒る　雲の中、
蒼海の水　舞ひ立つて
北斗をひたす　こともあらなん！。
あゝ　歌をすてゝ　また現世を　思ひなば、
金翅鳥王(コンジ)　天に荒びて
鐵翮(テツカク)拂ふ　天(アマ)の河、
颶風起つて　星落ちて

雨と飛び散る　こともあらなん！。

二

歌をおきて　他し心を　我持ちて、
廬(イホ)にいつく　我が神に　我負きなば、
その狂ひ立つ　蒼海の
水に溺れて　身は悶え、
その雨と飛ぶ　大空の
星に擊たれて　心　惱まん。

第二十章

一

浮世の富の　威力(チカラ)無や、
黄金(コガネ)　萬貫　何を買ひ得る？。

500

老いて悲しく　髪　白む時、
たゞ一莖(スヂ)の　黒き毛をだに、
いかで新に　買ひ求め得ん！。

二

願はしからぬ　世の富や！。
蠅は　あされし　肉に集(ヨ)り、
虱は　温(メク)き　垢につく。
銅錢の香の　なまぐさき、
人間(ヒト)の蒼蠅(アホバヘ)　これに集り、
内懐(フトコロ)の　あたゝかき、
浮世の虱　はひまはる！。
富　たゞ招く　蠅　虱！。

富　たゞ招く　蠅　虱！。

三

うき世の富を　何戀はん、
浮世の富を　何戀はん。
投げの情を　賣る里の
あだな櫻の　中にさへ、
すいと立つたる　若松の
お千代が歌に「足る事を
しる鍋一ッ　埒の明く
庵は富貴　自在鍵」よと
洒落(シヤレ)て退(ノ)けたる　心ゆかしや。

四

世を花やかに　おもしろう
たのしげに行く　山車の牛、
ちやんちきぐの　鳴物に
囃さるゝ身も　安逸は無う
夏の一日　荷は強く、
夕陽に辿る　歩重し！。
一門　光り　輝きて
世に囃さるゝ　物持の
見る目まばゆく　榮ゆるも、
山車の牛ぞや　山車の牛！。
何か異なる　山車の牛！。

五

翠山園む　村古りて、
白雲の底　雞唱ふ、
午寂々と　しづかなる
僻地の瘠田　鋤く牛の
歩みもゆるく　日を暮す
心のごけく　ゆつたりと
尾を動かすや　春の風。

六

山田鋤く牛！、山車の牛！。
虚榮の街の　かしましき
笛鐘の音に　わが耳を
濁して　心　疲らせて、

他の玩弄と　ならんより、
自然に近き　山里の
松樹の根方の　書休み、
梢頭の風に　罪も無き
夢を吹かせて　田夫と
共にまどろむ　小半時、
羽翼つかれし　蛺蝶に
角は假しても　よしやよし、
たゞ我が性を　遂げんこそ
いつはりあらぬ　望みなれ。

七

浮世の富を　何戀はん、

浮世の富を　何戀はん。
我　詩に富まば　足りぬべし。
われ我が神を　祈る時、
我が神笑みて　我を召す。
召されて登る　雲の梯。
雲の浮梯　危くて、
脚を失して　空さまに
身は落ち來れば　夢さめて、
詩をおもひ寐の　枕頭、
青き錦の　囊あり。
囊中の物、何ぞ〳〵、
皆これ無字の　詩卷なり、

神われに賚ふ　詩卷なり。
我これを讀まば　詩に富まん。
わが身の貧を　何か憂へん。

第二十一章

一

日は爛々と　かゞやきて、
夏の澤水　湯のごとく、
太莞秀でゝ　一丈の
琅玕青く　新しき
其の葉に上る　太鼓蟲！。
天戀ふ願望　今日滿ちて
衣脱ぎすてゝ　蜻蛉と

我が名呼ばれて　飛びて立つ。
白き生絹の　羽輕う
天翔ける今　飛び返り、
もぬけの殼を　かへり見て、
心ひそかに　水蛭の
昨日の我が名　忌み厭ふ！。

二

心ある士の　世にあるや、
日々に新に　また日々に
新に身をば　變らせて、
昨日に今日の　美しく、
今日より明日は　又善くて、

我が生を經んと　こひねがふ。
天飛び翔くる　蜻蛉は
水蠆の舊身　戀はぬなり。
男兒いさゝか　心あり、
昨日の我を　恒に愧づ、
昨日の名譽　何かせん。

三

疑みて已まず　世を經れば、
昨日の我は　太鼓蟲！、
今日の我が身ぞ　あきつ蟲！。
進んで已まず　世を經ては、
また今日の身を　水蠆にして、

明日の我が身を　空高く行く
蜻蛉とこそ　爲んとおもへ。
昨日の我を　人の呼ぶ
心羞しき　身のほまれ！、
それはもぬけの　水蠆の殼！、
それはまことの　水蠆の殼！。

四

昨日の我は　我ならで
我の今のみ　我なれば、
名譽は何ぞ？、ゑびむしの殼！。
名譽は何ぞ？、蛇の脫殼！。
ゑびむしの殼、醜しや、

たゞ〳〵水に　流すべし。
蛇のぬけがら　白くとも
たゞ〳〵風に　任すべし。

五

現世の名の　何に値す？。
ゑびむしの殼！。蛇のぬけがら！。
虢氏は淡く　峨眉を掃へど、
惡女しきりに　白粉を戀ひ、
賢者多くは　名を厭へども、
痴物大抵　譽をば釣る！。

六

賢者の賢は　我知らねども、

痴物の痴をば　我厭ふなり。
譽を釣つて　何にかもせん、
詩を釣らば　我　足りぬべきなり。
詩を釣るか、酒！。酒　飲みつべし。
一斗の酒に　醉ひて狂ひて、
百篇の詩に　笑みて興じて、
生命死すとも　よしや惜まじ、
詩仙　例あり　詩仙　例あり！。

七

長風に　髪　さばかせて、
鯨魚に騎つて　醉を吹き、
浪を破つて　去りしてふ

その安傳(イツワリ)も　おもしろや。
天に上らん　詩(シ)思の募らば、
水に溺(オボ)るゝ　最期(ハテ)も佳(ヨ)からむ。
善惡(サガ)無き人の　口にかゝりて、
無き名云はれて　そしらるゝとも、
叶はぬ戀の　なか〳〵に
浮名も嬉し　心遣り、
歌ゆゑならば　甘なひつべし。

第二十二章

一

汚れしものゝ　絶えて無き
雪山の牛　芳(カンバ)しき

草のみ食(ハ)みて　日をおくる、
その乳(チ)汁何ぞ　濃く甘き！。
天の漿(コンヅ)と　味(アヂ)佳(ヨ)くて、
その色何ぞ　美しき！、
白璧(シラタマ)溶けて　微(アヲミ)青あり。

二

村女　その年　十一二、
花は蒼(ツボミ)の　猶かたく、
春まだ知らず　心(ムネ)清し。
我が父母の　命により、
朝々しぼる　牛の乳。
淨水　洗ひ　洗ひたる

浄瓶　これを　盛りたゝへ、
日に〳〵山の　岨道を
みづから運び　もたらして、
道に心を　澄まし居て
世をば思はぬ　婆羅門の
住める岩窟の　前に置く。

三

婆羅門　ある日　わが道の
おもひに深く　耽り居て
供養の乳を　打忘れ、
飲まずて時を　過しゝが
夕風立ちて　草靡き、

金星　幽に　光る頃、
飲まんとすれば　牛乳饐えぬ。

四

雪山の牛、牛　清し。
信士の女　女　良し。
浄瓶　浄く　汚無く、
窟に何の　塵も無し。
されども牛乳は　すえはてぬ。
されども牛乳は　すえはてぬ。
牛乳の中には　水の有りたり。
もとより牛乳に　水の有りたり。

五

牛乳に水あり。牛乳腐る。
戀に淫慾あり。戀いやし。

六

乳汁は水より　成れるなり、
水無き乳汁も　世にあらず。
戀慕は性慾に　伴へば、
慾を離れて　戀も無し。
たゞ乳汁いまだ　ふるびずて
饐えざる時に　價値あり。
たゞ戀　嫩く　幼くて
清らなる時　愛すべし。

七

牛乳を煉り煉る　黄金の鉢、
鉢あたゝかに　牛乳乾く！。
乾き〳〵て　水分去りて
乳汁は其名を　酥と呼ばる。
酥の味　何ぞ　それ美なる！。
仙家の花の　春足りて
芳香ゆかしく　甘露凝る！。

八

酥を煉り煉るや　玉の鉢、
鉢あたゝかに　酥は乾く！。
乾き〳〵て　水分去りて、
終に貴き　醍醐成る。

醍醐の徳の　奇なるかな！。
玉髓（ギヨクズイ）滑（スベ）る　舌の上、
異香　五臓に　滲（シ）み徹（トホ）り、
含めば消ゆる　雪甘く、
心火　忽ち　和ぎて
胸に清（スベ）しき　風薫る！。

九

醍醐となりて　乳汁は貴く、
詩に入つて後ち　戀　價値あり！。
詩をも知らざる　女あはれや、
詩をもおもはぬ　男憎しや。
現世の戀　何を値す？、

何の浮世の　色つけた肉！、
何の浮世の　肉つけた骨！、
それが何樣（ドウ）した　斯樣（カウ）したの戀！、
見る目も痒し　見るも厭なり、
聞く耳汚る　聞くも疎まし。
現世の戀　何を値す？！。
我　詩の中の　戀に溺れん。
我が神　我に　賜ふ　醍醐味、
饐え易き乳汁　我何にせん。

第二十三章

一

富貴は既に　棄てゝ願はず、

むかよしり云ふ　貧は士の常、
冬は古りたる　布子一貫、
夏は萎えたる　きびら一枚、
かくても濟めば　濟む世ぞと、
ひそかに傲る　廬の中。

二

廬に肉無く　魚無く、
庖厨清らに　鼠無く、
雜炊淡き　手とり鍋、
柚味噌薫る　夜の膳、
かくても在れば　ある身ぞと、
われと甘んず　獨り住。

第二十四章

一

名譽も既に　棄てゝ願はず。
夏の日中に　道傍の
木槿の花の　目に立ちて
馬に知られて　食はるゝを
ひそかに傷む　深山の樹。

二

深山の櫻　年々の
春來り　また　春去るに、
花咲きて　また　花散りて、
人に見らるゝ　事も無く、

枝を折らるゝ　ことも無く、
心ゆたかに　大空の
塵無き中に　立盡す。

三

木槿の花を　悲しみて、
深山櫻を　師と仰ぐ
心は人と　競はねば、
思ひは雲と　靜かにて、
槇の柱に　寄りながら、
鳶が輪を畫く　春の日の
空の青きを　眺めやる
廬（イホリ）物寂び　世と遠し。

第二十五章

耳聾（シ）ひて後　樂曲（キョク）を作（ナ）す。
其の樂曲　天の聲あらん。
身ありて戀に　狂ふ時、
戀　猶肉塊（ニク）の　香のあらん！。
空を結んで　文（アヤ）を成す
音樂（ガク）の神趣に　あこがれて、
身ありて後に　情起る
浮世の戀を　厭ひ棄つ。

第二十六章

我　一切を　棄てはてゝ
たゞ〳〵ひとり　詩をおもふ！。

此の物言はぬ　流れのほとり
此の靜かなる　柳に近く
引結びたる　盧の中に
我たゞひとり　詩をおもふなり、

第二十七章

一

牛(ナカズ)　水無き　山河の
潤(ヒロ)き　磧(カハラ)の　まなご石。
月ある夏の　夜冷えて、
ひそかに結ぶ　露の珠。

二

石上の露　溥(タン)々と

何の色無く　たゞ寂びて、
眞珠ころがる　蓮の葉の
水の光は　無けれども、
ひとりしづかに　清(ス)み澄みて
濁りなければ　天と地と
遠くて近き　幾萬里、
月に情あり　尋ね來て
其の懷中(フトコロ)に　影宿す！。

三

女　まことに　人を思へば、
眉　描き惱む　鑑の前、
芳心　糸と　亂れ〳〵て。

郎を笑ます　貌無きを愧づ。
我　むかしより　詩をおもふ時、
句を成し惱む　小齋の中、
文字足らぬに　意餘りて
胸は流れぬ　水と苦しく、
詩神を笑ます　才無きを慚づ、
詩神を笑ます　才無きを慚づ。

四

貌無きを羞ぢ　貌無きを羞づ、
女の胸の　あはれ切なる、
其の心また　美とも見るべし。
才無きを愧ぢ　才無きを愧づ、

我が年來の　たゞおろかなる、
詩神　或は　あはれとも見ん。

五

露だに清めば　月に情あり。
見よ、天上の　一痕の月！。
石の河原の　萬點の露！。
萬點の露　露ごとに
月の光りの　無きも無し。
露たゞ清めば　月に情あり。

六

嬉しや　月に　情はありけり。
心一つに　詩をおもふ、

身は色も無き　石の露、
思を澄まし　澄ましゝに、
風が吹き奪(ト)る　雲の衣、
詩神の月の　影さして、
なさけの光り　かつ添ひし
或夜ひそかに　悦びぬ。
嬉しや　月に　情はありけり。

第二十八章

一

浮世はすべて　捨てはてぬ。
世を樂まん　心なし。
晨鐘(ジンシヤウ)の音の　夢さめて、

むかしを笑ふ　今の我、
厭(イヤ)や櫻！厭(イヤ)や戀！、いやゝ酒！。

二

空想の神　なつかしや。
詩のおもしろさ　身に染みて、
肘をもたする　廬の窓、
寂として句を　案ずれば、
堤(ツヽミ)長く、水長く、詩思(オモヒ)長し。

第二十九章

一

世には背けど、法衣(コロモ)着ず、
佛陀(ホトケ)の道は　肯(ウケガ)はず。

冬の野に
木枯寒き　すたれる巖と　身をなして、
氷にとぢし　山の井の
たゞ情無う　冷えわたる
佛陀の教　何にせん。

二

花は　いろ〳〵　咲き散れど、
朝顔いとし　罌粟花(ケシ)憎し。
世をおもひ切る　けしの花、
その散り際の　氣(ケ)は酷く、
未練に殘る　朝顔の
心やさしく　憐れなり。

けし　憎むべし、うとむべし。
あきらめ過ぎて　智慧過ぎて、
なさけが足らず　愛足らぬ
佛陀の道は　うけがはず、
我　詩の神を　たゞいつく。

第三十章

わが詩の神の　尊しや。
その御心の　光り照る
その御國　皆　美しゝ。
時知らぬ花　こゝにあり、
常住の月　こゝにあり。
不老の門の　内の春、

盡くること無く　あたゝかに、
玉しく不死の　庭の井に
涸れぬ泉の　湧き上る。
美人萬人　萬々人、
雲のごとくに　むらがりて、
勇士の萬騎　萬々騎、
星のごとくに　集ひ居る。

第三十一章

雌雄相呼ぶ　花の間、
禽に歡喜の　聲ありて、
芳雲護る　禽の影、
花　圓滿の　香を送る、

梵王宮の　春の色、
六慾足りて　自在なる
それにも増して　おもしろき
神のみなさけ　頼もしの
空想の鄕　妙なりや。
たゞ一念の　願ふもの、
彈指の間に　皆現じ出で、
寸心馳せて　おもむけば、
千里の山河　眼の前に在り、
龍　驅使すべし、虎　馴らすべし、
神代このかた　世の人の
唱ひし歌を　皆おぼえたる

木精の歌も　聞きて知るべく、
幾春秋の　果しなく
霞に遊び　霧に寝て
山めぐりする　山姥の
山に立ち舞ふ　振も見るべし。

第三十二章

獨り寐る夜も　梅あれば、
寝ざめゆかしき　庵の春。
まして優しき　詩の神の
神の氣息の　香はしき
中に起臥す　朝ゆふべ、
その懷かしさ　身に染みて、

何の生命の　五十年、
露惜からじ　歌のため、
我が神に我　捧げなん、
天　長しへに　神にいつきて
大地　久しくも　廬は出まじと、
一日ひそかに　思ひきはめぬ。

第三十三章

一

夏流れ、冬流る、
流れて休まぬ　廬前の川。
春も好し、秋も好し、
好し柔順なる　廬後の柳。

875

川水ゆるく、柳しづかに、
盧　物寂び、人　老いんとす。

二

人やゝ老いて、笑を含んで、
古句を誦(シヤウ)して、閑窓に倚(ヨ)る。
「詩卷　長く留めん　天地の間、
釣竿(テウカン)　拂はんと欲す　珊瑚の樹。」

三

窓前の春　あゝら樂しや！。
窓前の秋　あゝら樂しや！。
風やはらかに　天うらゝかにして、
川水ゆるく、柳靜けし。

第三篇

第一章

一

青天　忽として　春雷　動き、
芳草　亂れ披いて　雄雉　起つ。
俄に聞ゆる　物の音！。
俄に聞ゆる　人の聲！。

二

物音　何と　耳を澄ませば、
こはすさまじの　物の音や。
鐵蹄　石を蹴つて　萬馬　怒り、

刀槍　戛と　鳴つて　壯士　奮ふ。

三

人聲　何と　耳を立つれば、

「男兒！西せよ！、男兒！西せよ！。

西方に敵あり、人道の敵！。

西方に敵あり、平和の讎！。

人道の敵　懲らすべきなり。

平和の讎　懲らすべきなり。

男兒寧ろ當に　格鬪して死すべし、

いづくんぞ能く怫鬱として　長城を築かん！。

防りくて、堪へ堪へぬ、

今は堪へじ、擊つて、擊て！。

男兒！西せよ！、男兒！西せよ！。

西方に敵あり、人道の敵！、

人道の敵　懲らすべきなり。

西方に仇あり、平和の讎！、

平和の讎、懲らすべき也。

男兒西せよ、西せよ！。」と呼ぶ。

第二章

われたゞ廬の　我が神の

玉の御聲を　聞かんのみ、

對ひの岸の　物の音を

心に入れて　何せんと、

耳を塞ぎて　氣を澄まし、
小爐に添ふる　一片の
金桂の香の　空に去る
有無の間に　詩をおもふ。

第三章

一

昨日の水に　今日の水、
濁れる水に　清める水、
千古續きて　流れ〳〵
山より海へ　行く川の
その川下る　船のいろ〳〵！。

二

昨日の船に　今日の船、
薪の船に　炭の船。
日々に變りて　流れ〳〵
川上より川下へ　來る船の
その水棹執る　人のいろ〳〵！。

三

いづくより來し　小舟なるらん、
大江の中流　小舟　今　來て、
如何なる人の　それに潜める？、
徐に起る　歌の聲する！。

四

毛笘葺きたる　胴の間の蔭、

姿隱れて　吟聲ばかり洩る。
其の聲　何ぞ　緩く悲しく、
世の船歌の　をかしきに似ず、
その歌　何ぞ　意遠くて、
戀も情も　敢て歌はぬ！。

五

小舟　流るゝ　盧の前、
吟聲　起る　笘の中。
何人　歌ふ　何の歌、
歌とし　いへば　嬉しくて
歌とし　聞けば　耳ぞ立つ、
いでや、聞かうよ、人の歌。

第四章　船客の歌

一

天より風の　下す日は
孤雲流れて　先づ動き、
地より風の　起つ朝は
小草戰ぎて　先づ顫ふ。
天をいたぶき　地に立つて
天地の靈を　方寸に
結びて有てる　人間の
此の心　先づ　雲と動きて、
此の心　先づ　草と戰げば、
大天の下　大地の上、

此の世の中に　おそろしの、
刼運の風　吹かんとす。

二

刼運の風の　おそろしや、
この風　一トたび　吹く時は
鬱々（センく）　芊々　美しき
國土　たちまち　相貌（スガタ）變りて、
巍然　赫然　隆昌（サカン）なる
國家　あるひは　命を更む。

三

此の風　そつと　過ぐる夜は、
瑠璃の甍の　高樓（タカドノ）も

ゆらぎ〳〵て　安からず、
寶鐸（ホウチヤク）　叫ぶ　聲亂れ、
雕梁（チヤウリヤウ）　軋る　音凄く、
翠帳の内　人愁ふ。

四

まして悲しき　山岨（サマヘバ）の
眞葛の絡（カラ）む　賤が家、
または小暗（ヲグラ）き　谷間（タニアヒ）の、
杉の根方の　笹小屋は、
衛（マモ）る力も　あらざれば、
秋の木の葉と　情無（なさけ）く
たゞ一ト吹きに　掃はれて、

屋根無き　霜の　朝寒み、
袖搔き合せ　貧者泣く。

五

この風狂ひ　狂ひ暴(アラ)べば、
二十八宿　星座(セイザ)壞(クツ)れて、
雲は惡鬼の　姿して舞ひ、
千里萬里に　劔火迸(ハシ)つて、
草は壯士の　血を吸はんとす。
刼運の風の、　あらおそろしや。

六

見よ美はしき　我が邦の
民の心の　雲と動きて、

草と戰ぎし　歳や幾歳、
刼運の風は　終に來れり。

七

あゝ山の花！、あゝ谷の花！。
夕(ユフベ)の雲の　したゝりの
甘きに醉ひて　生ひ出でゝ
春のあしたの　日の恩惠(メグミ)
あたゝかき世に　咲き匂ふ
あゝ山の花！、あゝ谷の花！。
花にそも〳〵　何意(コヽロ)ある？。
花たゞ譯も無く　咲きて、
花たゞおのが　香に匂ふのみ。

八

金色(キンシヨク)の民！、銀色の民！。
慈愛(ナサケ)の乳汁(チ)を　たゞ頼(タヨ)る
生れ落ちにし　その日より
道義の衣の　あたゝかき
下にやうやく　人となる
金色の民！、銀色の民！。
民にそも〳〵　何意ある？。
民たゞ譯も　無く　生きて
我が世樂しく　經んとするのみ。
民たゞ譯も　なく　生きて、
性を遂げんと　こひねがふのみ。

九

蠶(コ)を飼ふものは、蠶をおもふなり。
蠶をおもひ　蠶をおもふ
夜また朝。

蠶は眠れども　我は眠らず、
我は餓(ウ)うれど　餓ゑしめず蠶を。

十

桑植(クハウ)うるものは、桑をあはれむ。
桑をあはれみ　桑をあはれむ
冬また春。

おのが心も　凍りゆくほど
冬の夕は　雪を愁ひて、

おのが頭髪(カシラ)も　白(シラ)み行くまで
春の朝(アシタ)は　霜を悲む。

十一

民をはごくみ、國を保つ、
人の君　誰か　民をおもはざらん、
民をはごくみ、國を保つ、
人の君　誰か　國を愛(ラシ)まざらん。

十二

あらおそろしの　却運の風や、
山の花飛び！、谷の花飛ぶ！。
靜に咲きて　匂ひたる
それは昨日の　春となり、

枝吹きしをる　夜嵐に
山谷(サンコク)動き　鳴りどよみ、
山の花飛び！、谷の花飛ぶ！。

十三

あらおそろしの　却運の風や、
金色(キンシヨク)の民、銀色の民、
此民(コレ)競(キホ)ひ立ち　彼民(カレ)競ひ立つ！。
笑顔と笑顔　睦まじう
親子夫婦(イモセ)の　打そろひ
樂しく經(ヘ)しは　昨宵(ヨヒ)の夢、
今朝の現實(ウツツ)は　戈執りて、
大丈夫(ヲトコ)心の　角立つる

眼はたゞ遠く　戰場の
天を望みて　いきまきて、
家を忘るゝ　國のため、
妻を忘るゝ　君がため、
恩愛の故郷　後にして
修羅の衢に　向はんと、
金色の民　銀色の民、
此民競ひ立ち　彼民競ひ立つ！。

十四

あらおそろしの　劫運の風や。
蠶を飼ふものは　蠶をおもふなり、
賤の少女も　此の道を知る。

桑植うるものは　桑をあはれむ、
賤の男も　此の情あり。
民をやしなふ　あゝ　人の君、
人の君　誰か　民をおもはざらん。
民をあはれみ　おもひたまはぬ
君はまことに　ましまさねども、
見よ！、劫運の　風の吹く時
君の心も　あだになり行く！。
あらおそろしの　劫運の風や！。
日出づる國の　すめらみこと、
劍の劍欄　執りしぼり
西方見そなはし　立ちたまへば、

月沒(ツキイ)る方の　大君も
黃金(コガネ)の甲(ヨロヒ)　身に掛けて
東方(ヒガシ)を望み　起ちたまふ！。
劫運の風　終に來れり！。
劫運の風　終に來れり！。

十五

花は願はず　小夜あらし、
民は願はず　世のみだれ。
人君(キミ)　豈嘉(アニヨミ)し　たまはんや。
金鼓(キンコ)の響　関の聲。

十六

たゞ如何にせん　運命の

測り難きを　あゝ如何にせん、
逃れ難きを　あゝ如何にせん。
陰陽　激し　雷　起り、
鬱氣(ウツキ)　悶えて　地震(ナヰ)　ふるふ。
天地の事は　誰(タ)が爲(サ)するぞや、
人間(ヒト)の事　皆　人間が爲るかは。

十七

劫運の風　終に來れり、
劫運の風　終に來れり。
山の花　飛び　谷の花　飛び、
金色の民　銀色の民、
此民競ひ立ち　彼民　競ひ立つ。

劫運の風　終に來れり、
劫運の風　終に來れり。
浦安の國　浦　安からず、
大八洲人（オホヤシマビト）　島を出でたり！。

十八

見よ！　劫運の　風の姿を。
見よ！　劫運の　風の姿を。
昨日は・八の　心　幽（カス）けく
雲と流れて　動きたりしが、
今日は大兵　海を渡つて、
雄威堂々　氣肅々、
旌（ハタ）旗は雲なす　滿州の原に。

十九

見よ！　劫運の風の　姿を。
見よ！　劫運の風の　姿を。
昨日は人の　心やさしく、
草と戰（ソヨ）ぎて　顫（フル）ひたりしが、
今日は秋野の　霜の芒と
萬卒　劍を　閃かしつゝ
縱横蹂躙す　遼東の地（ツチ）。

十九

烏雲（ウシヲ）下り立つ　大曠野（オホヌノ）、
夕立（ユフダチ）雨の　どつと降り、
銀箭　萬枝　亂るれば、

尾花　葛花　萩　桔梗
本葉末葉の　別ちなく
濡れざる草も　あらぬなり。

二十

劫運の風　吹き荒れて、
彼の蒼々の　天が下、
此の茫々の　地の際涯、
塵を卷き　砂を卷き　礫を卷き、
物といふ物を　卷きて走れば、
沼怒り　川怒り　海怒つて、
水といふ水は　狂ひ逆立ち、
枯木は怨む　聲乾き切り、

嫩樹は泣きて　聲烟び入り、
凹める巖は　悶え呻きて、
聳ゆる巖は　叫び號はり、
魚は恐れて　深く潜めど
夢に魘えて　心驚き、
禽は愁ひて　更に飛び得ず、
身をば細めて　眼のみ動がす。
有情非情の　別ちなく
悲まぬもの　あらぬなり。

二十一

夕立降れば、草は皆濡れ、
兵火起れば　須陀も刹利も、

憂さは異らず　物おもふなり、
物おもはざる　人も無きなり。

二十二

劫運の風！　吹けよ吹け〳〵！。
吹かでは止まぬ　風ならば
吹けよ吹け〳〵！　何を厭はん。
おゝ！劫運の　風の吹くなり！。

二十三

世を忘れたる　水の上、
花を排いて　溯る
春の細流　魚を釣り、
身を安んずる　舟の中、

月に戕(カシ)阿ふり　假泊(カリヲ)する
秋の川隈　酒を酌み
幾歳經にし　此の叟(ラヂ)も、
まだ雲中の　人ならで
王土に生ける　民なれば、
よし、其の風に　兩鬢の
霜　戰(ソヨ)がせて　立上り、
鶴と癯せにし　老人(オイ)なれど、
空(アダ)にはなざじ　我が腕力(チカラ)、
御國の爲に　盡さんか！。
いで　笘撥退(トマヘチ)て　立たうかや！?。

二十四

大鵬は　搏たんと欲す　扶搖の風。
希有鳥は　翔らんと願ふ　焚輪の風。
太平の春　勇士睡つて、
豪傑奮ふ　戰亂の秋。

二十五

劫運の風　吹けよ吹け〳〵！。
勇士よ爾　笑みて起つらん、
爾の待ちし　時は來れり。
劫運の風　吹けよ吹け〳〵！。
豪傑！　爾　大功を成せ！、
爾待ちけん　機は來れり。

二十六

箕星は既に　動き〳〵て、
飛廉は既に　怒り怒れば、
逢々として　風渡り、
發々として　風扇り、

大鵬は　搏ち　上るなり、
希有鳥は　翔り　遊ぶなり。

二十七

劫運の風は　吹き渡るなり、
劫運の風は　吹き扇るなり。
勇あるものは　勇の翮を
鼓らして天に　搏ち上れよ！。
才あるものは　才の翼を

振ひて空に　翔り遊べよ！。

二十八

大風(カゼ)を悲み　草に潜める
禽や　何禽？。小がら！、小雀！。
小がら、小雀！、何ぞ醜き！。
時運(トキ)を恐れて　喞ち言する
人や何人？。無膽漢(フナシ)！、無骨漢(ホネナシ)！。
無膽漢！、無骨漢！、何ぞ卑しき！。

二十九

春に後るゝ　山間(サヤアヒ)の
菫々(スミレ)菜の花の　小さきも
風の渡れば　香を送り、

夏の初の　川岸の
蘆　嫩けれど　風行けば
葉擦れ　涼しき　音を出す！。
風をよろこぶ　大鳥の
思は無きも　小雀の
いやしき嘆(ナゲキ)　我厭ふ。
深山の菫々菜！、川の青蘆(アシ)！、
爾知るらん　我が心。

三十

世を忘れたる　水の上、
身を安んずる　舟の中、
幾歳經にし　老翁(オイ)なれど

笘(トマ)撥ね退けて　立たうかや。
まだ雲中の　人ならで、
王土に生ける　民なれば、
劫運の風　我を吹く！。
梶枕して　たゞ一人
火床(ヒドコ)舘に睡る　笘の下、
夢は馳せ行く　蓬萊の
島山めぐり　をかしきも、
深山の菫々菜　汝(ナレ)に慚ぢ、
川の若蘆　汝に愧づ。
深山の菫々菜、川の蘆、
爾知るらん　我が心

爾知るらん　我が心。

第五章

一

よどめる川の　漾々(ヨウヨウ)と
水の心の　長閑(ノドケ)くて
流れ流れず　流るれば、
漕がざる舟の　悠々と
動き動かず　動きつゝ
下(クダ)る姿も　ゆるやかに、
盧(イホ)の窓より　眺めやる
長江(チャウコウ)の畫の　一幅の
中にしばらく　見えけるが、

何時しか歌の　聲消えて、
夕暮起る　川霧の
彼方に隱れ　去りにけり。

二

いづくより來し　舟ならん、
水上遠く　眺むれば
たゞ茫々と　水　烟り、
人いづくにか　去りにけん
川下遠く　かつ見れば
たゞ漠々と　霧　埋む。

三

風の中なる　蘭の香の、

出處をたゞせど　出處知れず、
鏡の裏の　鳥の影、
痕もとむるに　痕も無し。
現か？現　夢をあざむき、
他かや？他の　我に似たるよ！。

第六章

我も浮世は　忘れたれども、
まだ雲中の　仙ならず、
我も廬中に　獨り住めども、
王土に生ける　民のかたはれ。！
實に夕立の　降る夕、
濡れざる草も　あらぬなり。

劫運の風　吹くあした、
身を吹かれざる　人もなし。
大風(カゼ)をよろこぶ　大鳥の
思は無きも　小雀の
いやしき嘆　敢てせず、
菫と咲きて　香を放ち
蘆と戰ぎて　音を立てん
願を述べし　彼の人の
歌の心の　あはれやさしや。
劫運の風　吹かん日を
爲す事なくて　過ごさんは、
菫よ！　我も　汝(ナレ)に慚ぢ、

嫩蘆(ワカアシ)！　我も　汝(ナレ)に羞づ。
彼の人　笛を　はねて出でなば、
我も蘆(イホリ)を　立ちて出でなん。
彼方の琴の　絃(イト)鳴れば、
此方の琴の　絃(イト)應(コタ)へ、
他人(ヒト)の心の　聲聞けば
おのが心も　聲響く！。
あゝ彼の人の　歌のやさしや！。
我が心動く！　我が心動く！。

第七章

あらおろかなり、おろかなりけり。
われたゝ蘆(イホ)の　我が神の

玉の御聲を　聞かんのみ。
流れの中の　笘舟の
その笘蔭の　人の歌、
心に入れて　何すべき。
われたゞ盧(イホ)の　我が神の
玉の御聲を　聞かんのみ。

第八章

一

我いとけなき　そのむかし、
都會(ミヤコ)の塵の　市中(マチナカ)に
我よく花を　造り得と
誇れる嫗(オウナ)　あるを見き。

二

浮世に老いて　白き髪、
額に智慧を　寄せし皺、
いと尊げに　見えしかば、
花無き冬の　ある夕、
稚心(ワカナ)の　疑はで
一枝の櫻　得んと願ひぬ。

三

吐く氣息(イキ)白う　眼に見えて、
大路(オホヂ)人無き　寒き朝、
「見よ、我が術(ワザ)の　妙(タヘ)なるを、
小禽も枝に　凍り着く

このあかつきの　北風に
我　咲かせぬ。」と打笑みて
老嫗（オウナ）は呉れぬ　山櫻。

花は盛りの　色　艶に、
三月（ヤヨヒ）の姿　今見せて、
世に美しく　忍まひたり。

四

冬の寂びたる　此のあした、
春を手にせし、嬉しさに
我よろこびて　遊びしが、
忽ち泣きて　恨みたり。
花はまことの　花ならで

たゞいつはりの　いろどりの
目をあざむきし　まさなごと、
人の巧（タクミ）と　知りし時。

五

美（ウルハ）しかりし　花瓣（ハナビラ）は
生絹を紅の　染めしなり。
つやゝかなりし　葉は何ぞ、
色を帶びたる　蠟の紙。
枝の太きを　見れば枯柴、
枝の細きを　見れば銅線（カガネ）。
まことの花の　名を冒しても
人の工（タクミ）の　淺きいつはり、

何おもむきの　あらばこそあれ、
たゞ見にくさの　眼にのみぞ立つ！。

六

我その日より　悟り知りたり、
人の手の若し　花を造らば、
その花眞の　花ならずして
花の眞實の　匂無きをば。

七

花はおのづと　春に開きて、
詩はおのづから　胸になり出づ。
人の手終に　花をなし得ず、
我が意の如何で　詩をばなし得ん。

おろかなりけり、おろかなりけり、
我が意の作る　詩はあらぬをや。

第九章

一

淡雪融けて　あらはるゝ、
土の濡れ色　新しう、
去歳の宿根の　よみがへり、
今歳の二葉　萠え初むる。

二

夢に酒無く　戀も無く、
覺めて現に　願望無く、
たゞ花を待つ　園守と、

我が名呼ばれて　微笑みて、
身を陽炎の　中にして
土塊(ツチクレ)砕く　細歯耙(コマザラヒ)、
照る日の夕　井を汲みて
やさしく恵む　如露(ジョロ)の水。

三

摘みては除く　醜草(シコグサ)の
庭蘿蔔(ニハダイコ)やら　鷹の爪、
取りては棄つる　いまはしの
氣(メハエ)條蟲　また　根切蟲。
老の生命の　せまり行く
それは思はで　初花の

そのあかつきに　あこがれて
日々に心も　身も使ひ、
土の澁氣に　指あれて、
日に焼け黒む　顔の色。

四

春の御神の　あたゝかき
御心香る　風吹けば
その神霊(クシヒ)なす　神業(カミワザ)を
たゝへまつりて　鳥　歌ひ、
そのうるはしき　みなさけに
心　勇みて　胡蝶　舞ふ。

五

春の御神の　愛深き
御心の隈　おもしろや。
深山の奥の　童子には
山の蕨を　賜はりて、
田つくる里の　乙女には
田芹を摘めと　賜ふなり。
花を待ちたる　園守に
終に賜ひぬ　花　幾朶。

六

待ち得し花の　笑顔見て、
小鍬片手に　煙草吸ふ
老いたる今日の　園守の

顔にも笑の　花ぞ咲く。

七

我たゞ花を　待ちぬべし、
我　園守と　身をなさん。
我　つくるべき　詩を知らず、
我　なり出でん　詩をおもふ。
盧に神在す、神在す、
我たゞ盧の　我が神の
玉の御聲を　聞かんのみ。

第十章

一

おろかなりけり！。　おろかなりけり。

我が神います　吾が廬を
出でゝいづくに　さすらひて
何見出して　何なさむ。

二

鼓子花(ヒルガホ)の色　薄くとも、
市(マチ)のはづれの　塵塚に
咲きて匂ふと　定まらば、
我その蔭に　假寐して、
乞丐兒(コジキ)の夢に　這ひかゝる
花の心も　問ふべきが、
塵は絶えねど　中々に
花は稀なる　世のならひ、

天地を飾る　美(カル)はしの
神の心の　芳(カグ)はしき
痕を尋ぬる　物狂ひ、
身を宿無しと　はふらして
露と寐る夜を　重ぬとも、
慾を切り組む　柱立、
冷き瓦　葺きおほふ
家居つゞける　都會(ミヤコ)には、
人のいきれの　ほめき立ち、
物の臭ひの　くさくして
清らに澄める　夕月の
光りを汚す　事もあれ、

何なつかしき　花咲きて
何のゆかしき　香の中に
醉ひて笑むべき　折あらん！。

三

おろかなりけり！。おろかなりけり。
わが神います　我が廬を、
いでゝ何處に　さまよひて
何見出して　何爲さむ。

四

絹をいろどり　紙を剪り、
銅線添へて　枯柴に
香ひ無き花　取りつくる、

いつはりの業　我　せむや。

第十一章

心を洗ふ　半盞の
山茶の味の　淡くして
詩を招び下す　一ト灶(タキ)の
香の煙の　靜なる
廬(イホリ)　寂々　薄墨の
夕の色に　鎖されて、
江村(コウソン)の暮　おだやかに
闇を誘ふ　五位(ゴイ)鷺渡る。

第十二草

一

里の兒童(コドモ)の　一ト群の
色の白きや　梅之助？、
丈夫らしきは　松太郎？、
二郎三郎　わや〳〵と
お花お蝶も　打交り、
寐に就く前の　一ト遊び、
まだ世の憂さに　染められぬ
聲美はしう　張り上げて、
手を取り連れて　歌ひ連れ、
歌ひ連れ行く　盧の側。

二

潮さし來れば　濡れ〳〵て、

濱の小石も　浸るなり。
潮に浸れる　濱の石、
濡れ色　玉と　美しや！。
國　事あれば　何知らぬ
心無き兒も　勇み立つ。
心無き兒の　譯も無う
いさめる氣色(ケシキ)　愛らしや！。

三

誰が作りたる　軍歌(イクサウタ)、
歌の意(コヽロ)の　猛くして、
誰が節つけし　軍歌、
歌の調の　烈しさや！。

四

堤の若葉　影暗き
彼方に子等は　去り行けど、
若葉　埋まず　歌の聲。
宵の明星　やゝ光る
その空の下　子等行けば、
明星　抱く　歌の人。

五

若葉の蔭を　出つ入りつ、
明星の下　徘徊(タモトホ)り、
すゞしく歌ふ　軍歌(イクサウタ)、
今新しう　また起る。

第十三章　兒童の唱へる歌

一

男兒女兒「行けや！。疾く行け！。いざや行け！。
紅色(クレナヰ)　匂ふ　東(ヒンガシ)の
朝日の光り　背に負ひて、
敏馬(ミヌメ)の神の　靈勇(タマイサ)む
朝の嵐に　船出して、
船首(ミヨシ)に碎く　雪の花、
萬里の濤を　乘り破り、
黑雲　鎖す　西の方、
海のあなたの　大陸の
闇に朝日の　旗立てよ、

闇に朝日の　旗立てよ。
行けや！。疾く行け！。いざや行け！。」

二

男兒「進めや進め！　いざ進め！。
義理の輝き　明らかに
仁慈（ナサケ）の光り　あたゝかき
朝日の旗を　押し立てゝ、
汚穢（ケガレ）に充てる　大陸を、
洗ひ淨めん　東海の
水の勢威（イキホヒ）　これ見よと、
春は彌生の　大潮の
磯に渚に　寄る如く

進めや進め！。いざ進め！。」

三

女兒「打てや打て〳〵！　いざや打へ！。
飽くこと知らぬ　鋭き目、
會釋もあらぬ　毒の爪、
おもひのまゝに　羽を伸して、
我が物顔に　大空を
翔りて荒ぶ　荒鷲の
隣りの鷄の　雛（コ）を攫む！。
憎さも憎し　打てや打て！。
打たずばやがて　我が池の
魚をも奪らん　目の配り、

憎さも憎し、打てや打て！。

四

男兒「うてや、うて〳〵！。うてや、うて！。
天つ御神の　御意は
我等が胸中に　影さして、
我が大君の　御言葉は
我等の頭上に　降りたり。
打てよと宣らす　天つ神、
打てとおほする　國つ皇。
腰に劒あり、肩に銃、
打たではおかじ！　我が敵！。
打たではやまじ！　我　男兒！。

うてや！。うて〳〵！。打てや！、打て！。」

五

男兒
女兒「うてや！。うて〳〵！。うてや！。うて！。
號令既に　下つたり。
砲烟既に　起つたり。
喇叭の聲は　雲に入り、
叱咤の叫び　岩を裂く。
生命は輕く　義は重し、
敵は何萬　ありとても、
我は一心　たゞ堅し。
退かじ、撓まじ　たじろがじ、
櫻の花と　血の散らば、

赤き心を　戰場の
土に印さん　我が願望！。
うてや！。うて〳〵！。　うてや！。うて！。」

六

男兒
女兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
勝負岐るゝ　戰鬪の
峠を越すか　越さるゝか
雌雄の決する　時は今。
かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
迅雷落つる　砲鳴つて、
霰たばしる　彈丸ぞ飛ぶ！。
敵も健氣に　振舞ふよ！。」

七

男兒
女兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
敵の強きも　おもしろし。
ふしくれ立ちし　大木を
斫つてぞ見せむ　大斧の冴。」

八

男兒
女兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
生命を知らず　飽までも
陣地を守る　剛敵の
防ぎ矢始何に　烈しくも。」

九

男兒
女兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。

敵の防ぎ矢　烈しくも
何か恐れん　神國の
勇士の頭（カウベ）の　神宿る！。

十

男兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
女兒「敵はいろめき　立つたるぞ。
突貫の命　下りたり、
遲疑せずかゝれ、疾くかゝれ！。

十一

男兒「大洋萬里　濶けれど、
燕は飛んで　越ゆるなり。
矢石冒して　突貫し、

勇士駈け入れ！　敵の陣。」

十二

男兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
燕は果敢無き　禽なれど、
心　萬里の　洋（ウミ）を呑む！。
勇士もとより　敵を呑む！。」

十三

女兒「谷は千仞　深くとも、
獅子は一躍　越ゆるなり。
敵の矢彈（ヤダマ）の　何あらん、
勇士切り入れ！　敵の陣。」

十四

女兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
獅子の一ト聲　百獸は
腸　裂けて　死する也。
勇士の前に　敵も無し！。」

十五

男兒
女兒『勇士駈け入れ　敵の陣、
敵を微塵に　駈け散らせ！。
勇士斫り入れ　敵の陣、
敵を木片(コッパ)と　斫り崩せ！。」

十六

男兒「山風(アラシ)渡つて　木の葉飛び、
勇士逼つて　敵亂る！。

山谷どよむ　鬨の聲、
我が旗高し　敵の陣。
見よ戰鬪は　勝つたるぞ！。
敵は戰場(シバイ)を　踏まへ兼ね、
遺恨の眼　幾度か
此方を睨む　猛將も
駒の頭を　反し得ず
我に背面を　見せたるぞ！。
此の圖ぬかさず　追ひまくれ！。
ゆるみを呉れず　追ひまくれ！。
可愛さ敵の　切齒して
殿戰(シンガリ)すとも　何あらん。

我は堤防を　切りし洪水！、
我を支ふる　ものも無し。
彼は割られし　竹の節！、
及（ヤイバ）迎へて　皆解けん！。
押せや、押せ〳〵、ひた押しに！。
總進撃の　喇叭鳴る！。」

十七

男兒「喇叭の聲の　勇ましく
總軍ふるふ　勝戰。
見よ戰鬪は　勝つたるぞ、
見よ戰鬪は　勝つたるぞ。」

十八

男兒「勝つて驕らぬ　將軍の
命をかしこむ　氣の締り、
肅々として　靜なる
中に勇威の　滿を持す。」

十九

男兒
女兒「敵の陣地の　あとあはれ！。
右往左往に　兵器散り、
兵器いづれも　血を帶びて、
三々五々と　死屍亂れ、
死屍猶握る　劒の柄！。
硝烟晴れて　日の光り
薄々照らす　野の面、

夕暮寒き　風吹けば、
草に倒れて　まだ死なぬ
馬の鬣　浪　戰ぐ！。」

第十四章

歌ひ〳〵て　去る子等の
聲やうやくに　遠ざかり、
影は隱れて、また見えず、
天には夜の　色滿ちて
星の光りの　稜角（カド）強し。
遊び〳〵て　行く子等の
影やうやくに　距たりて、
歌は薄れて　消えて去る。

闇に一トしほ　黑々と
若葉の堤　たゞ殘る。

第十五章

可愛き子等は　闇に去り、
勇める聲は　空に消え、
靜かさのみの　たゞ遺る、
盧は燈（ヒ）一ッ　人一人。

第十六章

一

我に友あり、『影』と呼ぶ。
『影』たゞ　契り　深き友！。
好くも好かぬも　中々に

去らず去られぬ　因果同士。
月に興ずる　秋の夜は
一ッの猪口の　酒飲みて、
花見てあるく　春の日は
負ふてやつたり　負はれたり、
幾歳睦び　語らひて、
死なば共にの　誓文を
筆で書くほど　野暮ならず、
よし鳴神の　落つるとも
その稲妻の　火の中に
手を取りあふて　終るべき
こゝろに虚妄(ウソ)も　無き交(ナカ)の

その友今宵　樂しまず、
憂に沈み　壁に倚る。

二

蝶驚けば　蜂も驚き、
鯉去り行けば　白魚(シラウヒ)また去る。
『影』うなだれて　物おもふ夜、
氣づけば我も　いつか頭を
低く垂れたり　燈火の前。
低く垂れたり　燈火の前。

第十七章

一

影「おゝ我が友よ！。おゝ汝！。

汝何おもふ？　此の夕。」
我「おゝ我が友よ、おゝ汝！。
汝何おもふ？、此の夕。」

二

影「汝のおもひ　我は知りたり。
里の童の　歌に感じて、
汝ひそかに　物をおもふよ。
實にも汝は　物おもふべし、
あはれ汝は　大地（ツチ）を結びて、
汝の身をば　成し居たりしよ。
大地は震へり、大地は震へり。
汝の心　あはれ震動ふよ。」

三

形「汝のおもひ　我は知りたり。
里の童の　歌に動ける。
我を汝は　いたみ思ふよ。
實にも汝は　我をいたまん、
あはれ汝は　たゞ光明（ヒカリ）もて
身をば成し居て　地に屬（ツ）かねば、
大地（ツチ）は震へど　汝愁へず、
愁ふる我を　いたみおもふか？。」

第十八章

一

影「おゝこの我は　光明の兒！。

父は天つ日、母は月！。
身は　美しう　曇りなき
光明の中に　生り出でゝ
翼無けれど　輕々と
虛空に遊び　翔りては
少時とゞまる　物の上、
沙上石上　苔の上、
蘭蓆の上、壁の上、
又或時は　青絹を
のべたる海の　水の上、
千草沒れて　川一ッ
たゞ殘りたる　雪の上、

汝と共に　幾歳を
睦み〳〵て　經たりしが、
汝は重く　濁りたる
地ツチより出でし　地の兒の
國土の緣に　引かされて、
國に事ある　此の日頃、
果敢なき心　打震ひ、
ひとり惱むぞ　あはれなる！。」

二

影天は風荒れ　海は浪立ち、
大地ツチは震へり　大地は震へり。
里の童の　舌足らぬ

歌に動くも　あらあはれ！。」

三

「國土の緑に　引かされて
胸のとぐろく　此の夕
果敢無き心　打ふるひ、
深きおもひに　沈み行く
汝を我は　悲みて、
つくづくいたみ、なげくぞや。
おゝいとほしの　我が友よ！。
我は天より　來れるに、
おゝいとほしの　わが友よ！。
汝は地より　生り出でぬ。」

四

「南海の山　清く秀でゝ
白鸚鵡　飛ぶ　彼の紫竹林
鸚鵡　自在に　飛びて遊べど、
我　猶　禽の　主有るを忌む。
金華の石室の　霧に花さく
蘭の香の中　睡る小羊、
羊悠々　睡り睡れど、
羊のために　仙　無なくもがな！。
我は天より　來りし身、
王土の臣に　あらざれば
心ゆたかに　あり得れど、

汝は地より　生り出でゝ
國土の恩を　負ひたれば
胸痛むべき　此の夕、
我も汝の　ため愁ふ！。」

第十九章

一

形おゝこの我は　地の人よ！。
地の鹽凝りて　骨を成し、
地の水集つて　血をたゝふ。
五尺の形骸(ムクロ)　いづくにか
地のおもかげの　宿らざる？。
おゝこの我は　地の人よ！。

光明の中に　なり出でゝ
虛空に遊び　翔りては
少時(シバシ)地に寓(ヨ)る　蜻蛉(カゲロフ)の
心も輕く　身も輕き
汝もさすが　我がために
物をおもひて　此の夕
しみ〴〵なげき　呉るゝかや。」

二

形おゝいとほしの　我が友よ！。
汝は天より　來れども、
おゝいとほしの　我が友よ、
我は地より　なり出でぬ。」

三

形「天は風荒れ　海は浪立ち、
大地(ツチ)は震へり　大地(ツチ)は震へり、
國土の緑に　心引かれて
果敢なくおもひ　惱む此の我。」

四

形「地より成れる　我を見よ！。
地より成れる　我を見よ！。
御代安らけき　大君の
恵の露に　八束穂(ヤツカボ)の
垂穂(タリホ)めでたき　稲食みて、
小田の雀の　身を保ち、

今日まで生命(イノチ)　活けるなり。
雀の生命、その生命！。
生命の中に　大君の
恵の露の　珠光る！。
恵の露の　珠光るぞや！。」

五

形「地より成れる　我を見よ！。
地より成れる　我を見よ。
神の敎の　御すがたと、
清く流るゝ　五十鈴川、
五十鈴の川の　濁りなき
その末汲みて　我が胸に

湛へて澄ます　我が心。
心の中に　神川の
水の清さの　恩籠る！。
水の清さの　徳籠る！。」

六

形世にあたゝかき　天つ日の
影をうつせる　日の御旗。
賤民(シヅ)が門にも　ひるがへる
御旗のかげに　あたゝかき
其の風吸ひて　また吸ひて
我おひ立ちぬ　おひ立ちぬ。
我が血の中に　漲らふ

御旗の靈の　あたゝかみ！。
御旗の靈の　あたゝかみ！。
我が血の中に　漲らふ！。」

七

形牡丹　美なれど　富に媚び、
梅　清けれど　世に疎し。
たゞならびなき　敷島の
倭の春を　うるはしう
飾る櫻の　花美し。
愛情(ナサケ)を含む　紅の
色はありても　婀娜つかで
汚れぬ雪と　咲きほこる

花のたましひ　いさぎよき
その香は浸(シ)みて　またしみて
我が骨髄に　宿るなり。
我が骨宿す　櫻の香、
我が骨宿す　櫻の香。
やまとの民と　生れ來て、
やまとの國に　身は老いぬ。
幾歳　花の　蔭に立ち、
幾歳　花の　香に醉ひぬ。
骨は櫻の　香に染みて
花に生命と　我契る！。
生きてやまとの　民となり、

死して櫻に　慚ぢざらん
願ひは骨に　染めるぞや。
見よ我死なば　我を焚け、
煙り　櫻の　香もあらん！。」

八

形我は地(ツチ)より　成れる身ぞ、
我は地(ツチ)より　成れる身ぞ。
五尺の形骸　いづくにか
地のおもかげの　宿らざる。
上は頭顱(ナツキ)の　髪の毛の
その毛の末の　末までも、
此の國の水　漲りて、

下は地を踏む　我が足の
足の小指の　爪までも
此の國の地の　鹽　凝れり。
我が血　我が骨　我が生命、
地より來らぬ　ものもなし。
我が心そも　誰が心ぞや
我が心もと　地の心なり。」

九

「天は風荒れ　海は浪立ち、
大地は震へり　大地は震へ。
我が身もとより　地より生りたり、
我が心もと　地の心なり、

國土の緣に　心引かれて
果敢無く惱む　我を憐め！。」

第二十章

一

「實にことわりよ。ことわりよ！。
汝は地より　出でし身の、
國に事ある　此の頃は
やさしき心　打しめり
果敢無き里の　童兒（ワランベ）の
歌に感じて　おのづから
物をおもふも　ことわりや。
栗の葉を食む　栗蟲の

その繭　栗の　色を帶び、
雪の野に栖む　野兎の
その毛に雪の　光りあり。
物皆おのが　なり出づる
本にそむかぬ　ならひなり。
おゝいとほしの　わが友よ。
汝は何を　憚りて
「我は地の人、國の人、
國に事あり、國のため
我　太刀執りて　立たうよ。」と
敢て叫ばで　いたづらに
物をおもふよ　廬の中。」

二

形おゝ此の我は　地の人、
「我は地の人、國の人、
國に事あり、國のため
我　太刀執りて、立たんず」と
おもはぬことは　なけれども、
我若しこゝを　立出でゝ
地の人とのみ　なりも果てなば、
我は汝と　長く別れん。
おゝいとほしの　吾が友よ、
我は地より　生り出でぬ。」
影おゝいとほしの　我が友よ、

我は天より　來れる身。」
形「我と汝と　長く別れん
その悲みに　我惱むなり。」

三

影「我は大地(ツチ)には　屬(ツ)かぬ身の、」
形「虛空に遊ぶ　大自在、」
影「此の現世(ウツシヨ)に　縛られで、」
形「詩神のあとを　追うて飛ぶ、」
影「心宇宙を　狹しとし、」
形「おもひ古今を　打忘れ、」
影「飄々として　意に任す」
形「汝が上の　好ましや。」

四

影「汝は天の　人ならで」
形「みづほの國の　國人と」
影「他(ヒト)に　よばるゝ」
形「神の末裔(スエ)！。」
影「春の蘆芽(アシカビ)　汚れなく」
形「生ひて出でたる　其日より、」
影「をのころじまの　潮風の」
形「めぐみを受けて」
影「育ちつゝ」
形「根は移さゞる
影「飽まで國を　此の心、」

形「離れざる」
影「汝のおもひ、また嘉みすべし。」

五

形「たゞ我慨む　我と汝と、」
影「その生り出でし　最初異なり、」
形「その生ひ立てる　今も異なり、」
影「手を分つべき　心地する今日、」
形「離れんとして　離れ難きに」
影「互に悩む　我と汝と。」

六

形「そのうまれだち　異なれば、
汝と我と　思ひ　差へど、」

影「この情契の　深ければ、
我と汝と　心　一つに、」
形「我も汝を　捨て得ねば」
影「汝を我も　離れ得ず、」
形「我も汝を　いとほしみ、」
影「汝を我も　なつかしむ、」
形「たゞ如何にせん　此の夕、」
影「我も汝に　従き得ねば、
形「汝も我に　伴へぬ、」
影「地に居るものと　天飛ぶ身、」
形「鶏寒うして　樹に潜み、」
影「鴨寒うして　水に沒る、」

形異なる中に　同じの
底の心は　ありながら、」
影同じき中に　異ある
物質の隔に　分けられて、」
形一つになれぬ　恨めしさ！。」

第二十一章

一

影汝を連れて　大空の
雲の八重垣　立つ裏に
汝が戀ふる　詩の神の
玉の御殿　おとづれて
遊ばんとすれば　あなあはれ！、

汝は重き　地の人！。
霞を躡みて　騰り行く
仙人の輕き　氣も無くて、
櫻の梢　吹きわたる
此頃の風　うれたみて
花の樹蔭を　去りやらず、
空しくおもひ　沈めるよ！。」

二

形汝を連れて　我はまた、
我が生り出でし　國のため、
國に事ある　此頃を
大丈夫の徒坐　口惜しと、

力は　よしや　弱くとも、
心の弓に　弦かけて、
鋭さ　よしや　足らずとも
思ひの征矢(ソヤ)の　鏃　礪ぎ、
麻にまじらふ　蓬(ヨモギ)の身、
勇士の間(ナカ)に　挾まりて
勵まんとすれば　あな憎や、
汝は輕き　光りの兒！。
百里の園の　美なるにも
人間(ヒト)の作れる　籠(コ)の中に
垂尾(シダリヲ)曳かぬ　鳳凰の
眼は長へに　天を見て

飛ばんとおもひ　焦るゝよ！。」

三

影「互におもふ　まゝならぬ」
形「汝いとほし　我もあはれや。」
影「互におもひ　おもひあふ」
形「汝いとほし、我もあはれや。」
影「如何にかなさん。」
形「如何にせん。」

第二十二章

我　手を取りて　『影』を抱けば、
『影』手を取りて　また我を抱く。
言葉は絶えて　情懷(オモヒ)殘りて、

殘れるおもひ　絶ゆることなし。

第二十三章

一

怯(オク)るゝ馬は　勇者　愛せず、
勇者　咎無し　馬に咎あり。
愚痴なる婦　高士　棄て去る、
高士　罪なし　婦　罪あり。

二

空足搔(カラアガキ)して　駈け出でぬ
馬の醜さ　誰も見るなり、
勇者　咎なし　勇者　咎なし。
理の明るきに　從はぬ

婦の愚昧(オロカ)　自己(ワレ)は知らずや、
婦　罪あり、婦　罪あり。

三

あら　うとましの　我身やな。
詩の神我を　見かへらで、
詩の神我を　棄てたまひけん、
我　詩の神の　玉の御聲を
聞くこと　こゝに　長く絶えたり。
あら　うとましの　我身やな！。

四

胸に二ッの　おもひあり、
二ッのおもひ　爭ひて、

詩に進む氣の　張り弱く、
空足搔する　醜さに
詩の神　疎み　たまひしか。
取るべき路は　知りながら
取るべき路を　取りかねて、
心の慾を　去りなやみ、
理に就かざりし　おろかさに
詩の神　厭ひ　たまひしか。
我　棄てられぬ　詩の神に、
あら　うとましの　我が身やな！。

五

糧秣（マグサ）　亂れて　夏　臭く、

馬屋　小暗く　蟻螻（メカゲ）　飛ぶ
中に嘶く　瘦馬の
棄てられて猶　主をおもひ
主をおもひ鳴く　聲顫ふ！。
主をおもひ鳴く　聲顫ふ！。

六

油無き髮　卷きつくる
黃楊（ツゲ）の髮櫛　齒も缺けぬ。
鏡に負く　日は積みて、
燕の夫婦　睦まじう
此の春風に　又も來て
ひねもす語る　梁の上、

一人其燕見て　一人住む
家たゞ廣く　淋しきに、
棄てられし妻　おろかにも、
人の行方を　猶おもひ、
おもひ〳〵て　つくづくと
思ひて細る　胸暗く、
夜に燈火(ヨルビ)　無き心地！。
夜に燈火(トモシビ)　無き心地！。

七

嘶(イナ)く聲の　悲しきも
駑馬の嘶き　甲斐も無く、
悔の涙の　あつくとも

愚婦の涙に　價値(アタヒ)無し。
馬悲めど　勇者來らず、
女泣けども　高士歸らず、
仙車　痕無く　雲に隱れて、
靈光　空(アダ)に　眼に遺るなり。

八

仙車　痕無く　雲に隱れて
靈光　空に　眼に遺るなり。
我が廬の神　廬を見すてゝ、
いづくの里に　いでましにけむ、
世に妙なりし　空想の香は
今　現世の　塵と變れる！。

盧の中は　いつか荒(スサ)びて
いづくに神は　去りましにけん、
神の御聲は　更に聞えず、
人の叫の　耳にのみ入る！。
我　詩に饑えて　詩をおもへども、
詩の影さゝず　芸窓(ウンサウ)の下。
我が神懸ひて　神を呼べども、
神降りまさず　小齋の中。

九

身は繋がるゝ　馬柵(コセバシラ)、
柵に傍ひて　主をおもふ
思ひ悶ゆる　鵞馬(タリウマ)の

心の恨　長くして、
胸に深霧(モヤ)立つ　獨り居の
夕　悲しき　鐘の聲、
消えにし聲の　あとを追ふ
女心の　おろかにも
郎を慕ふ　遣る瀬無の
迷　果無き　我がこゝろ！。
我　詩の神の　玉の御聲を
聞くことこゝに　長く絶えたり、
あら　うとましの　我身やな！。
我　棄てられぬ　詩の神に！。

第四篇

第一章　若き人の歌

一

人の歌皆　墨を以て成る。
我が歌ひとり　血を以て成る。
血をもつて成る　我が歌の文字、
一〻起つて　大空に舞へ。

二

男兒歌はず　蝶鳥の情、
野客(ヤカク)猶知る　君王の恩。
國開けて　二千五百年、

國に事あり　我が血湧き立つ。
我願はくば　歌を作りて、
我が血の沸ゆる　音を寫して、
歌に鐵鼓の　響あらせん。
歌に鐵鼓の　響あらせん。

三

鼓を作る　百煉の鐵、
鐵鼓一トたび　鳴つて響けば、
野草靡(オビ)えて　末葉(ウラハ)露散り、
蟋蟀(シツク)鳴かず　土に平伏(ヒレフ)す。

四

心頭燃え燃ゆ　愛國の念、

心火怒つて　我が血沸え立つ。
男兒たゞ歌ふ　愛國の歌、
歌に一世を　おほふ意氣あり。

五

血をもつて成る　愛國の歌、
歌成つて句々　皆生命(イノチ)あり。
鬼神を拉(ヒシ)ぐ　精神(コロ)盛んに、
道義を輔く　氣象大きく、
星よ菫よ　月よ百合(ユリ)よの、
歌皆羞ぢて　逃げ走るなり。

六

我　國のため　國をこそおもへ、

なに歌のため　歌をつくらん。
人たゞあれや　愛國の念、
歌たゞあれや　血の沸ゆる音。

七

硯の海に　紫色(ムラサキ)の
雲湧く墨の　色佳きも、
墨をもて成る　其歌の
匂　そも〳〵　何かある！。

八

花をいたみて　泣く涙、
戀にやつれて　詠む愁、
歌めかす歌　やさしきも

おもひの終に　何になる！。

九

男兒歌はず　蝶鳥の情
野客猶知る　君王の恩。
我　歌人(ウタビト)と　呼ばるゝを愧づ、
たゞ愛國の　狂と呼ばれん。

十

言葉あやどる　歌の奴隷(ヤツコ)の
拜(アガ)む神を　脚下(アシ)に踏まへて、
槲(ホコ)　横(ヨコ)たへて　歌をつくりて、
軍の神に　犧牲(ニヘ)とさゝげん。

第二章

形「聞け、我が窓の　外の聲。」
影「歌の御神を　輕しめて」
形「誇りに誇る　其人の」
影「物狂はしう　嘯きて」
形「過ぐるを聞くも」
影「うとましや。」
形「如何なる人ぞ、」
影「何人ぞ？。」

第三章

形「窓前の客！、窓前の客！。
君など歌の　神を卑む？。
國をおもふは　さもあらばあれ、

詩を罵るは　何のこゝろぞ。
瑪瑙　火に飽く　君の容顏、
君なほ若し　血のみ　身に滿つ！。
璞　琢磨かれぬ　君の言語、
言語の圭角　何ぞ苛らぐ！。
君　青春の　意氣に誇るも、
浮世の水の　酸きを嘶みて、
ひそむる顏の　皺に老い行く
我が身の秋の　暮に臨まば、
君また終に　此の我が如、
必ず知らん　詩の神の德。
詩の神いつく　此の廬の前、

神を黷(ケガ)すな　若き血の人！。」

第四章　若き人の言

一

「小盧の主人！　何啣(カヨ)つ！。
我　老いたりと　おもふほど
世に愚なる　ものは無し。
たゞ永久(トコシヘ)に　若き血を
湛(タヽ)へて生きん　わが願望(チガヒ)！。
われ老い進(スヽ)ぶ　ことあらじ、
我　詩の神を　何にせん。
詩の神や何！、ことをかし。

二

男兒歌はず　蝶鳥の情、
野客猶知る　君王の恩、
國開けて　二千五百年、
國に事あり　我が血湧き立つ。
我　國のため　國をこそおもへ、
何　歌のため　歌を作らん、
人たゞ有れや　愛國の念、
歌たゞ有れや　血の沸ゆる音。

三

汝　小盧の主人　且つ聞け、
現今(イマ)はそも〳〵　何の時ぞや。
大戰　海の　外に起つて、

國のためにと　男兒　身を捨つ。
見よ　うら若き　女泣く、
彼が夫の　遺髪の前。
見よ　いたいけの　兒童泣く、
父の寫眞の　其の下に。

四

涙の眼には　花も無く、
愁の耳に　鳥も無き
此の時何の　歌あらん。
此の時何の　歌あらん。
歌の神！、去れ！。なまぬるし。
歌人！、退れ！。なまぬるし。

五

知らずや詩仙　李太白、
巴陵に登り　洞庭の
戰鼓の音を　聞ける日は、
東籬の下に　徘徊る
彼の淵明を　嘲みしを。

六

優遊の人　憎むべし。
優遊の人　憎むべし。
言葉あやどる　歌の奴隷の
拜む神を　脚下に踏まへて、
槊　横たへて　歌を作つて、

軍の神に　贄と獻げん。

第五章　形の言

壯士過ぎませ、吾が廬の前。
人おの〳〵に　希望あり、
希望巽へば　業　巽ふ。
人おの〳〵に　心あり、
心たがへば　氣もあはず。
山に柴刈る　山樵と
海に魚取る　漁翁と、
相見て笑むは　市中の
酒屋の帘の　習風に
人を手まねぎ　する蔭の

たゞ束の間に　過ぎざらん。
鰯雲　立つ　夕空を
ながめて海の　人は去り、
山鴉　啼く　聲きゝて
山人歸る　山の家。
おもひ〳〵の　それ〴〵に、
面と面　相反き、
背と背　互に　遠ざかる
それも浮世の　すがたなり。
我等は歌に　あこがるゝ、
君はしきりに　世をおもふ。
我等は歌に　あこがれて

一句得なやむ　夜を深み、
髭を思案の　手すさみに
撚り〳〵て　撚り斷つ
をかしきわざに　身をせめて、
世にはおのづと　疎く經ぬ。
君のしきりに　世をおもふ
心は鐵の　まろかせの
眞紅の火炎　揚げ居りて、
觸るゝ塵　皆　焚き盡す
それにも似たる　勢に
歌をも詩をも　卑しむる。
我は山樵　海を見ず、

斧杖つきて　山を愛で、
君は漁翁　山知らず、
釣竿をかたげて　海を褒む。
おもひ〳〵の　それ〴〵に
おのれはおのれ　君は君。
希望たがへば　業たがひ、
心たがへば　氣も合はず、
爭ふもまた　甲斐無しや。
君たゞ過ぎよ　吾が廬の前。
君たゞ過ぎよ　吾が廬の前。

第六章　影の言

狂士去れ去れ、吾が廬の前。

酒はたぶ〳〵　酒なるが酒！、
歌はたぶ〳〵　歌なるが歌！。
酒ならぬ酒、酒　厭ふべし、
歌ならぬ歌、歌　嫌ふべし。
此の現世（ウツシヨ）の　醜（シコ）の奴（ヤツコ）と
なりて甘なふ　醜の奴の
瘠肘（サセヒヂ）怒る　蟷螂（カマキリ）の姿（ナリ）、
國のためとて　うたふ其の歌、
蛙の聲の　あだに騒ぐも
蛙、蟷螂、歌は得なさじ。
歌の御神も　仰ぎまつらぬ
汝　狂客　憎き我が敵（カタキ）！

狂士去れ〳〵　吾が廬の前。

第七章　若き人の言

一

笑ふべし　小廬の人の
胸せまく　我を怒るか。
逐はるとも　居りたくば居て、
留むとも　倦かば去るべし。
川添の　水づくところ、
剖葦鳥（ヨシキリ）は　愛（メ）でゝも宿れ、
我が見ては　戀ふにも足らぬ
此の廬の　ほとりに立ちて
此の夕　我　何にせん。

二

おろかや　爾！
わが言を　聽け！。
爾はおのが　廬にすくみて
廬を天地と　思ひ做すらん、
我は天地を　吾が家にして
心も高く　世をぞ經るなる！。

三

秋風吹きて　紅葉して
やがて嵐に　散り行かん
山路の蔦の　葉の裏に
わが世を頼む　蝸牛（カバムシ）の

自ら限る　おのが殼、
殼に潜みて　籠り居の
我　賢しと　誇るとも
はかなき活計（ミスギ）　誰　褒めん

四

雲に羽を伸（ノ）す　鴻鵠（オホトリ）の
ゆたけき態（フリ）は　無きまでも、
榛（シン）の樹林　栗林
心まかせに　飛びうつり、
必らず森の　第一の
高き梢に　身を置きて、
鋭き聲に　威を誇る

200

百舌鳥にも慚ぢよ　盧の主！。

五

人の世に在る　二萬日。
首をすくめ　尾をすくめ、
手足すくめて　藏六の
龜の醜き　智慧假りて、
たゞ事無きを　こひねがひ、
世の慾捨てゝ　詩に睦び、
詩に親みて　世を忘れ、
二百十日の　風の日も、
天見て歎く　農人の
深き恨は　餘所にして

おのが庭なる　女郎花
尾花かるかや　秋草の
しどろもどろに　亂るゝを
悲しみて詠む　痴歌、
吟哦に耽る　二十四時、
病も無くて　泣き呻き、
白紙汚す　墨汁と
頭上の髮の　黑色をば
使ひ盡して　文字書いて
浮世に遺す　それが何！。

六

歌とは何ぞ　何ものぞ！。

世に役立たぬ　のらものが、
泣きし笑ひし　夢の骸骨（ホネ）！。
赤白（シャクヒヤク）の肉　解け失せて
雨打つ野邊に　骨殘り、
悲歡の夢の　痕消えて、
風寒き世に　歌存る！。
歌とは何ぞ？。夢の骸骨のみ！。
夢の骸骨たゞ　世に殘るとも、
歌仙の名さへ　悲しからずや。

七

人の世に在る　たゞ二萬日！、
惜みてもまた　たゞ二萬日！。

甲を日に乾す　泥龜の
睡り靜けく　沼中の
小島に棲みて　老ゆるごと
生命（イノチ）生くとも　何にかはせん、
たゞ二萬日！　たゞ二萬日！。
意氣を重んじ　身を輕んじて、
朝（アシタ）に笑みて　夕（ユフベ）死すべし。

八

花は樹に咲く　春の一時！。
人は世に在る　我が身一代！。
婦女（フヨナ）はあはれ　世に愛されよ、
男兒は敢て　國を愛せよ！、

臙脂と咲く花！。雪と咲く花！。
臙脂たゞ濃かれ！。雪清くあれ。

九

我　幸に　男兒たる身の
萬念すべて　洗ひ盡して
たゞ愛國の　一念を有つ。
この念　胸に　燃えて熾りて、
男兒と生れ　出でたりし身の
尊き事を　わづかにぞ知る！。
男兒歌はず　蝶鳥の情、
野客猶知る　君王の恩、

十

吾が脚は吾が　路を行くべし、
我が運命は　吾が手取るべし、
汝は睡れ　小齋の中、
我は去らなん　長堤の陰。

第八章

むしの嫌ひし　道連も
晝　追分に　分れては、
並樹の松に　日の暮るゝ
夕　淋しき　習なり。
有りのすさびに　つらくせし
人も去りては　なつかしく、
呼び返したき　心地して、

盧(イホリ)音無く　更け行けば、
夜の色おほふ　水黑く、
川添柳　風絶えて、
柳も睡り　水も寐る。

第九章　客詩人の歌

一

禽は睡る　樹の茂み、
魚は寐る　水の澱(ヨド)。
小夜ふけて　睡らぬは
愚なる　詩人のみ。

二

大空に　巖黑く、

山は寐る　闇の底。
奥山の　闇深く、
雲は寐る　岩の窟(アナ)。
小夜(サヨ)更けて　睡らぬは
おろかなる　詩人のみ。

三

罪あるものは　いねがてに、
戀する人は　夢成らず。
身は罪も無く　戀もせで、
夜を寐がてに　物おもひ
更けて夢路に　猶入らず。
誰が褒めもせぬ　詩に凝つて

燈油(アブラ)と共に　生命耗(へ)る
短檠の下　句を練れば、
人を侮る　荒れ鼠、
奇々と嘲みて　駈け走る。

四

むかしの粹は　いひけらし、
夜道を照らす　小提灯、
更けて歸るは　俳諧師ぞと。
今宵おろかの　此の我は、
夕暮出でし　詩の友を
たづねて闇に　迷ひ迷へり。

五

こゝに廬あり　廬に人あり。
人何をおもふ　燈火の下。
燈火搖れて　影は動けど
人は動かず　ものをのみおもふ。
柳も睡り　水も寐し
中に覺めたる　たゞ一人、
この人もまた　詩をやおもへる?。
この人もまた　詩をやおもへる?。』

六

更けて睡らぬ　人に尋ねん。
貴卿(オンミ)そも〳〵　何をおもへる?。
柳も睡り　水も睡れり、

禽(トリ)も睡れば　魚も睡れり、
戀に悶へて　一人覺むるか、
わがごとく　若(モ)し　詩をやおもへる。

第十章

一

主「何？。わが如く　詩をやおもへる？。
おんみは　さては　詩をばおもふか。」
客「詩をおもはずば　如何で此の世に
あり得んとまで　おもひ居る身ぞ。」

二

主「嬉しや、酒を　酒盞(サカヅキ)は得ぬ。
佳(ヨ)き友よ友！、盧に入りませ。」

酒盞　酒に　あへる哉、
佳き友よ友！　盧に入りませ。

第十一章

客「盧(イホリ)　物無く、たゞ四壁立つ！。
物無き盧　おもしろき哉。
詩は貧を招び　貧は詩を招ぶ、
物無き盧　詩もや盈つらん。
嗚呼盧好し　盧好し、
こゝにして人　詩を語る、
半盞の茶に　興有らん。
我に酒無し　たゞ詩あり。
酒盞　酒に　あへりとは

をかしき人の　戯言(たハむレ)や！。

第十一章　主人の言

一

主「外の言葉は　戯れて、
内の意は　誠(マコト)意なり。
味無く香無き　雨水は、
地に落つるとも　さもあらばあれ。
琥珀かぐやく　醇酒(ヨキサケ)を、
沙(スナ)にそゝぎて　何とすべきや。
琥珀かぐやく　醇酒は
其の一滴も　惜むべし。
露ばかりぞと　人のいふ

露の珠なす　一滴も、
七十粒の　美稲(ウマシネ)の
美膏(ウマシアブラ)を　搾(シボ)りてぞ
わづかに釀(カ)みて　成ると聞く。
琥珀かぐやく　醇酒は
そゝぐべからず　砂の上。
必らず盛れや　玉盌(タマモヒ)に、
盛れや　汚れぬ　酒巵(サカヅキ)に。

二

君　詩ありとは　云はざるや、
詩は酒ならで　何ならん。
稲の膏は　酒となり、

心の膏　詩とぞなる。
人をば醉はす　歌の一句の
その源は　涙幾滴、
滴々あつき　眞實(マコト)凝らして
わづかに歌は　成り出づるなり。
酒惜むべし、歌惜むべし。

三

我　一樽の　酒ありし日は
これを注(ツ)ぐべき　酒巵の
清きを得んと　願ひにき。
われ一篇の　歌ありし夜は
これを聞かさん　友もがなと

心ひそかに　おもひたり。
詩を戀ふれども　詩を得ぬに、
心悶ゆる　今の我、
君にすゝめん　酒無きも
地にそゝがせじ　君が酒。

四

あはれ酒巵　羞(ハヅ)かしや、
黄金(コガネ)にあらず　玉ならず、
心のみたゞ　深草の
土器(スヤキ)の清き　ばかりにて、
見る目陋(イヤ)しく　悲しきも、
君　幸に　厭はざれ。

第十三章　客の言

一

「味ある君が　言葉かな、
實に〳〵歌は　酒ぞかし。
たゞ我が酒の　淡くして
人を醉はさん　滋味足らず、
君が酒巵　美しき
こゝろに相應ふ　色香無し。
我が酒薄し　酒薄し。
薄きも無きに　勝れりと、
むかしの人は　云ひたれど
無きにも劣る　薄き酒！。

二

浮世に遠く　火の氣無く、
夜露　朝霧　たゞ寒き
深山の奥の　岩蔭の
岩のくぼみに　蛇葡萄を
摘みて集めて　猿丸が
釀すとも無く　釀したる
その猿酒に　紅葉を
誘ひておつる　村時雨、
雨水入りて　薄まりし
其酒にも似たる　我が歌を
君に獻げん　由も無し、

歌といはんも　おもぶせや！。

三

おもしろき歌　よき酒は、
仙家の春を　世に招(ヨ)べど、
拙き歌と　酸き酒は、
たゞ皺ましむ　人の眉。

四

清みて静けき　壽相あれども、
濁りて厚き　福相は無く、
詩人の面、五嶽六府に
春色無くて　秋氣多きを、
更に悪詩の　贈り物して

君が面(オモテ)を　ひそましめんや。
君が眉根を　皺ましめんや。

五

美女には贈(オク)る　玉の簪、
武夫にはおくる　汗血(カンケツ)の駒。
詩を好く君に　あへる此の夜、
おくるべき詩の　無きぞ悲しき。

六

君聞け、我に　若き友あり。
竹の大地(ダイチ)を　出しごとき人！。
世をおもへども　詩をばおもはず、
詩をおもはねど　心やさしく、

たゞかりそめの　喜怒(キド)も笑罵(ジヤウバ)も
口を出でゝは　皆歌となる。
其の友と、我　こゝに來つらば、
如何に樂しき　今宵ならんを、
被(ヒ)を共にして　昨夜(ユフベ)寐つれど、
手を携へて　出でし今日しも、
川邊の蘆の　蘆の葉がくれ、
相失ひて　相別れたり

七

維摩(ユヰマ)の女(ムスメ)　月上が
手には蓮花の　咲きに咲き、
まことの歌の　神の兒の

胸より歌は　溢れ溢る。
彼だにあらば　詩あらんを、
直に此處に　詩あらんを。

第十四章

一

主「男兒歌はず　蝶鳥の情、
野客猶知る　君王の恩、
聲高やかに　幾度か
此の一聯の　句を誦して
意氣に誇れる　若佼(ワカウド)の
先にこゝをば　過(ヨギ)りにき。
君が友若し　その人か？。

われ其の人と　語りたり。」

二

客「闇の千鳥は　聲にあらはる。
言葉を聞けば、その人は見ゆ。
そは吾が友に　疑も無し、
など君　彼を　とゞめざりしぞ？。」

第十五章　主の言

一

我はひたすら　詩をおもひ、
彼はしきりに　世をおもふ。
詩をおもふ人　世を疎(ウト)み、
世をおもふもの　詩をあざむ。

山に柴刈る　山樵(ヤマカツ)と
海に魚取る　漁翁(ムラギミ)と
希望(ノゾミ)たがへば　業たがひ、
意あはねば　氣もあはず、
西と東に　立別れ、
左と右に　そむきたり。

二

彼の人　鐵と　剛(コワ)くして、
我また　石と　堅意地の、
圭角(カド)觸れあふて　火をすつて
石の火飛べる　後闇く、
直に別れて　また會はず、

互に離れ　退きしのみ。

第十六章　客の言

一

「あら、聞えざる　事を聞くかな。
あゝ、いはれ無き　事をきくかな。
世をおもふ人　詩をあざむとや！。
詩をおもふもの　世をうとむとや！。
聞えぬ道理！、何の故ぞや、
あゝ、いはれなし　何の故ぞや、
鵠毛（クヽゲ）、雲雄毛（ヒメリゲ）、栗毛（クリゲ）、驪（カケ）、鹿（クロ）、
馬と馬とは　毛嫌ひもすれ、
火性、金性、木性、水性、

人と人とは、性も合はざれ、
詩と世と何の　あだむことある！、
世と詩と何の　背くことある！。

二

詩は鏡なり、詩は鏡なり。
鏡の中の　影像（スガタ）さま〴〵、
そは現世（モツシヨ）の　眞實（マコト）ならずや。
影像なければ　鏡　色無く、
世をほかにして　詩ある事なし。

三

現世は土！　現世は土！。
土に生ひいづる　花のいろ〳〵、

そを歌といひ　詩ともいふなり。
土の腴瘠は　花にあらはる、
詩と異なれる　世あることなし。

第十七章　主の言

一

弓絃は弓の　隷僕なれども
弓に倣はず　直に世を経て、
的は射る箭の　脇師なれども
箭に諂ひて　身動ぎはせず。
客をうやまふ　おもひ深きも
我をあざむく　心持たねば、
罪得がましく　悲しけれども、

君が言葉を　我戻かなん。
弓絃　直なり　勿怒りそ　君！、
的　静なり　ゆるせかし　君！。

二

我　世を疎み　世を棄てゝ
たゞ詩をおもひ　詩に暮す。
歌は浮世の　影映る
鏡か水か　我知らず。
さし潮の芥　退き潮の芥、
芥の流れを　時運とはいひ、
東風の塵　西風の塵、
塵の颺るを　世態とぞいふ。

鏡か水か　我知らず、
芥の流れ　塵の舞、
見ても甲斐なく　おろかしき
映れる影を　何愛でん。
映れる影を　誰愛でん。
見ても甲斐無や　おろかしや。

三

世を厭へばぞ　詩をおもふ！。
銀河の水を　地に招びて、
娑婆の垢汚を　洗ひ去り、
雲螭に騎つて　天かけり、
胸臆の苦悶を　晴けたき

心よりこそ　詩をおもへ。
されば君聞け　聞けや君。
茶はたゞ無かれ　腥羶氣、
詩はたゞ無かれ　世の臭味。
詩によりて　我芥無き
海の廣きを　眼にうかめ
詩によりて　我塵の無き
風の清きに　呼吸せんと
日頃ねがへり　日頃ねがへり。
鏡か水か　我知らねども、
我　詩をおもふ　世をばおもはず。

第十八章　客の言

一

君は小川の　底の小石の
水にそまらぬ　心懷きて
ひとり常盤に　堅く眞白く
月日　經るにも　似たる人哉！。

二

風吹かば吹け　雲行かば行け、
風と雲とは　空に任せて、
淵は瀨となれ　瀨は淵となれ、
淵瀨の變に　身はあづからず、
物　動けども　我は動かず、
形　移して　神　移さず、

生れのまゝに　生命靜けく
過ぐす小石を　君は學ぶか、
おのれを抂げて　吾が生淋しく
過ごす小石に　君の何ど似る！。

三

小川の底の　石よ！。小石よ！。
守る操は　餘りありとも
餘りに世には　そむき過ぎずや。
小川の底の　石よ小石よ！。
白き淸さは　餘りありとも、
餘りに堅く　小さからずや。

四

君聞けや君　試みに聞け！。
世を厭ふ人、世を愛づる人、
人はそれ〴〵　怒り笑へど、
世は人々を　容れて餘れり。
花薫る世や、嵐吹く世や、
世はさま〴〵に　清み濁れども、
詩は世を容れて　餘りあるなり。

五

君聞けや君　試みに聞け。
南天遠き　十字星、
十字の星の　御座より、
北洋　照らす　七星の

軸の子星に　至るまで
蒼穹　長さ　幾千ぞ！
たゞ紺青の　空高く、
壽星を見れば　辰星を見ず、
子の星見れば　十字星を見ず。
天　渺々と　際涯無く
思へば廣く　濶けれど、
詩聖の歌に　入る時は
わづか詩卷の　一頁！。

六

印度のむかし　霧籠めて、
埃及の史も　おぼろなる

上つ世の其の　上つ世の
エデンの園も　猶成らぬ
アゾアの時の　遙けしや！
時　悠々と　久しくて
おもへば遠く　遠けれど、
古今を須臾に　寫し取る
筆の穗先の　露の間の事！。

七

何を嫌はん、何を嫌はん、
詩は大なり、詩は大なり、
天地を罩めて　日月を呑み、
三世に亘り　十方を兼ぬ。

八

街衢は廣し、物を嫌はず。
雨に散る花、風に散る花、
花散る時は　花を飛ばしめ、
東風の塵、西風の塵、
塵　舞ふ折は　塵　颺らしむ。

九

海はゆたけし、心せまらず。
黑き鷗、白き海鴎、
鳥　居る時は　鳥を浮めて、
上げ潮の芥　退き潮の芥、
芥ある折は　芥も身に負ふ。

十

花の散る　よし、塵の舞ふ　好し、
鳥の居る　よし、芥の行く　よし。
五彩まじつて　錦繡(ニシキ)且つ成り、
若葉　落葉に　樹は育ち立つ。
詩は街衢(チマタ)より　猶廣くして
海よりも詩は　猶もゆたけし。

詩は大なり　詩は大なり、
何を厭はん　何を厭はん。

十一

仁者は　人を　あだむこと無く、
勇士は　敵の　無きを悲む。

世を詩の嫌ふ　ことは無からん、
詩と世と何の　惡きことある!?。
詩は世を容れて　餘りあるなり。
君　詩の神を　あやまりなせそ。
すでに　君　詩を　おもひながらに、
世を厭ふとは　何の意(コヽロ)ぞ?、
あゝ所以(イハレ)無し、あゝ所以無し、
世は詩の神の　掌(テ)の中の珠!。

十二

君　聞けや　又　試みに聞け!。
天地　わづかに　開け闢けて、
雲　水　いまだ　分れ別れず

浮脂(ウキアブラ)のごと　國　若き日は、
獨り成りたる　神もおはしき。
葉は秋に落ち、花は春　咲き、
山岳　聳え、江河　流れて、
萬法　既に　定まれる世は、
獨り成るもの　更に有る無し。
霜は　あしたの　冷えに結ばり、
氷は　夜の　風を得て凝る。
詩は如何にして　成りて出づるぞ、
何　しら雲の　山を離れて
空に遊びて　漂ふがごと
たゞおのづから　湧くといふとも、

雲は土石の　蒸せる氣に成り、
詩は世運(セイウン)に　釀されて成る。

十三

小雨しづかに　あたゝかき朝、
大魚　躍つて　水を出でゝも、
魚はたちまち　また　水に入り、
足る事知らぬ　心　つのれば、
浮世浮世と　世をうとみても、
人は浮世を　離れ得ぬなり。
萬法　既に　定まれる世は
獨り成るもの　更に有る無し。
雲は土石の　蒸せる氣に成り、

詩は世運に　醸されて成る。
世を離れ得ぬ　人のこの身の
思ひのつくる　歌の幾篇、
篇篇に皆　世の香（カ）　有るべし、
篇篇に皆　世相　やどらん。
浮世の　すがた　世のにほひ、
たゞ　そのまゝに　詩ならずや。

十四

花の咲く日は　花を歌ひて、
歌に留めよ　其の花の香を。
月の照る夜は　月を歌ひて、
歌に寫せや　其の月の照り。

花に眼を閉ぢ　物思ひして
春光九十　あだに過すな。
月に早寐の　扃（トボソ）　固めて
秋おもしろき　夜をよそにすな。
風も歌なり、雲も歌なり、
雪も歌なり、霧も歌なり、
鶯の聲　それも歌なり、
燕の舞の　それも歌なり。
頭をあげて　あめつちを見よ、
造物　日々に　我に贈るに
取れども盡きぬ　歌を以てす。
たゞ其の儘に　寫し取りなば、

そこにめでたき　歌は成るべし。

十五

歎き　悅ぶ　人のいろ〳〵、
泣くも　笑ふも　歌ならぬかは！。
亂れ　治まる　時のさま〴〵、
凶(アシ)きも　吉(ヨ)きも　すべて歌なり。
見よ、太平の　春風の中、
風船買つて　三歳(ミツ)四歳(ヨツ)の兒に
持たせて　親子　につこりと笑む
其の　眼と　眼との　なかに歌あり。
見よ、いくさある　昨日此頃、
曲れる腰の　白髮の婆、

村の鎭守の　神の御前(ミマヘ)に、
滿州の野は　風荒くとも
吾が兒　無事なれ、恙　無かれと、
合はせて祈る　骨節(フシ)高(ダカ)の
其の掌(テ)の　甲(カラ)に霰　散る
涙の雫　幾滴の
中に　悲しき　歌のあらずや。
よろこびも歌　悲しみも歌。
幾歳(イクトセ)　おもひ　おもはれし
二人のおもひ　今日　遂げて、
金屏の中　さかづきに
心　ときめく　それも歌。

召されて　出づる　軍裝の
夫を送る　停車場、
涙　こらふる　人の前、
綾の手巾（ハンカチ）　咬みしぼる
妻のおもひの　それも歌。
太平の日は　笑みて歌ひて、
太平の世を　飾り　いろどり、
戰ひの世は　戰ひの世の
すがた寫して　歌と　殘せや。
世のいろ〳〵に　耳を塞ぎて、
さま　おもしろき　世を　よそにすな。
戀も歌なり、罪も歌なり、

まよひ　歌なり、恨み　歌なり、
勇士の怒る　それも歌なり、
仁者　憂ふる　それも歌なり、
熱涙も、熱血も歌、
燃えに燃えたつ　愛國の意氣、
それも歌なり　それも歌なり、
湧きに湧き立つ　懷鄕の念、
それも歌なり　それも歌なり。
頭をあげて　八方を見よ、
浮世は日〻に　人に贈るに、
取れども盡きぬ　歌を以てす。
たゞ其のまゝに　寫し取りなば、

そこにめでたき　歌は成るべし。

十六

水を離れて　住む魚も無く、
世を遁れ得る　人もあらねば、
花の咲く日は　花を歌ひて、
花に浮かれて　醉ふも宜からん、
月の照る夜は　月を歌ひて、
月に嘯ぶき　行くも宜からん。
浮世のすがた　世のにほひ、
たゞ　そのまゝに　詩ならずや。
詩は世よりこそ　成りもすべきを、
君　など　詩をば　おもひながらに、

空しく　世をば　厭ひ棄つるや。

十七

地に躓づきて　倒れたるもの、
地をあだみても、地に依りて起ち、
地をば離れて　起つことも無し。
世を見限りて　世を厭ふもの、
世を厭ひても、世に依り立ち、
世をば離れて　立つことも無し。
厭ひて厭ひ　果つる世ならば、
世を厭ひても　有りぬべけれど、
身を無きものと　思ひ棄てゝも、
世に雪の降る　其の日　寒くば、

厭ふとてしも　遁れ得ぬ世に、
浮世浮世と　喞ちごとする
それも　よしなの　あだな繰言！。
詩にあこがれて　世をば厭ひて
ひとり　いほりに　君　籠るとも、
國に事ある　昨日此頃、
君の心の　ひとり　安きや、
君の心の　ひとり　安きや。

第十九章　主の言

一

金鉢（コンペイ）　觸れぬ　病眼（ベウ）の膜！。
おゝ、我が心　安きこと無し。

國に事ある　昨日此頃、
心　分れて　迷ひ　わづらふ。
人の世の風　吹きて荒べば
心の海に　浪の騷ぎて、
我が詩の帆船　破れ　たゞよふ！。
詩をおもへども　詩を思ひ得ず、
悶え　わづらひ　惱み苦しむ！。
金鉢　觸れぬ　病眼の膜！。
おゝ、我が心　安きこと無し。

二

金鉢　觸れぬ　病眼の膜！。
痛くも痛き　君の言葉に

今　我　知りぬ、我悟りたり。
我は　我たゞ　ひとり居て、
我がいつはらず　欺かぬ
心の奥の　深きより
詩を　汲み得んと　願ひたり。
我は　野中に　掘りかねの
深くも深き　井を鑿りて、
磐の底より　眞清水の
清きを得んと　願ひたり。
君は　人の世　それ〴〵の
すがたの中の　清き[1]より、
詩を掬(カヽ)べよと　示すなり。

君は　山の根　谷のあひ、
巖間の清水　苦清水、
笹の下行く　細流れ、
白沫立つる　瀧川の、
到るところに　よき水を
見て掬べよと　示すなり。

三

我　今　知りぬ　我　悟りたり。
掘り井の水も　水は水！。
泉の水も　水は水！。
水には何の　たがひ無けれど、
天に雨無き　土用旱(デリ)、

雲　火を含む　夏の日に
小さき我が井　涸れ果てゝ
水　汲みかねて　悶えたるなり。

膏雨（アブラアメ）　降る　太平の
世の静かさの昨日　去り、
塵を捲き立つ　戰ひの
風騷がしき　今日に遇ひ、
小さき　心驚きて、
詩を得惱みて　苦みしなり。

四

實に〳〵　歌は　いと大なり。
實に〳〵　世をば　人は距（サ）り得ず。

實に造物は　人に贈るに
取れども盡きぬ　歌を以てす。
實にも浮世は　人に贈るに
取りて盡きざる　歌をもつてす。
井を掘るほかに　水を得る道
無しと　たもひし　迷ひ　忘れて、
其の井の　ほとり　去りて見遣れば、
清き川あり　清き瀧あり、
水は掬ぶに　餘りありけり。
耆婆（ギバ）の眼（マナコ）の　照し見る時、
野もせに茂る　千草八千草、
藥ならざる　草も無からん。

詩は我が胸の　奥の奥より、
湧きて湧き出で　成るばかりかは、
天の四時(シイジ)に　人の七情、
浮世のすがた　すがたさまざま、
詩ならぬものも　少かるべし、
詩ならぬものも　少かるべし。

五

小さき盧(イホリ)！。いほり　何せん！。
いほりを出でゝ　眼をあげて見て、
大平の世は　笑みて歌ひて、
戰ひの日は　戰ひの日の
すがた留めて　歌を殘さん！。

實在も歌。空想も歌！。
小さき盧！。盧　何せん！。
詩神は盧に　いますばかりか、
天地いづくに　歌の御神の
おはさぬところ　そもや　あるべき！。
天地は　すべて　歌の御神の、
其の御殿(ミアラカ)と　今ぞ知りぬる！。
いほりを出でゝ、立つて望めば、
天地　歷々　寸眸に在り。

第二十章

小さき禽の　聲の小さく、
節調(フシ)のはで　歌　澁るとも、

820

長き夜の夢　今覺めて、
朝日に勇む　我が心、
身を寄せ馴れし　一ト枝の
安きを　あとに　振り棄てゝ、
あしたの風の　つめたきに、
羽ぶしを鳴らし　飛び立つて、
千里萬里の　野に翔り、
我がまだ知らぬ　八千草の
花の色香を　尋ね〳〵て
歌ひ歌ひて　神にむくはん。

明治三十七年十二月二十九日印刷
明治三十八年一月一日發行

實價金八拾錢

著作者　幸田成行

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田メム

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂（電本五）

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　齋藤章逵

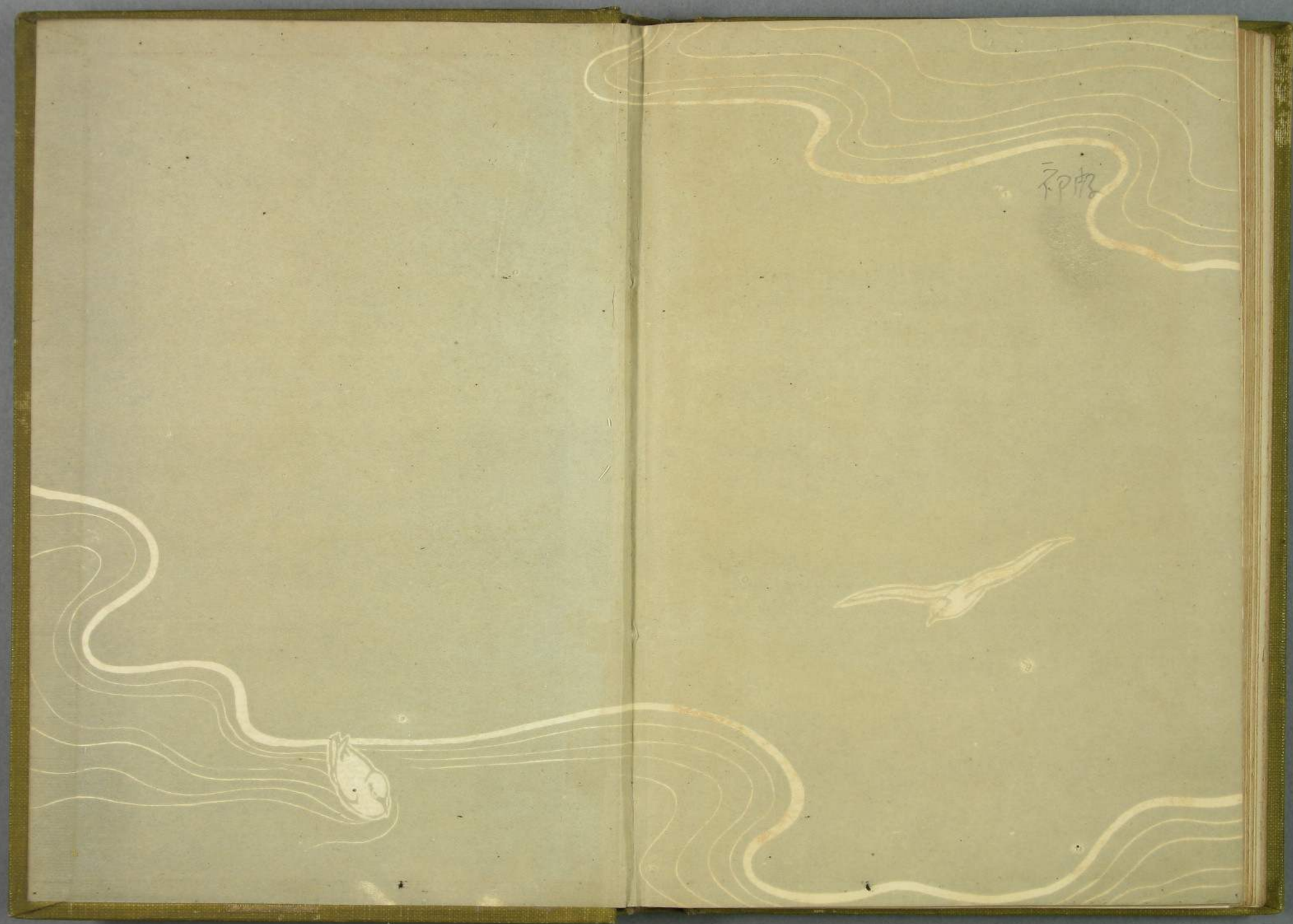
印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

近刊

出廬抄註

神谷鶴伴著

是は鶴伴氏、出廬の中の故事出典等を、一々露伴氏に質問し、其の答を得たるを書き集められしものなり。


印刷